理想的學生

34
特
259
153

文學同志會藏版

259-133

序

現今學生の名を冒す者ハ萬を以て數ふべしといへども理想的學生と稱せらるべきもの果して幾人かある身体の健康を保全し知識の發達を完成し德性の修養を充實し以て自己の人格を高め社會の公益を圖り啻に人としての義務を盡すのみならず學生としての責任を感じて未來の國家を双肩の上に擔ひ心ハ愈々豪邁勇壯ょして行は益々温良恭謙なる者學識深遠なるょ從ひ實際的應用に富める者是れ即ち理想的學生なり又今日千萬學生の理想となすへき所なり苟くも此理想的學生の輩出するを見る

明治
39 4 18
内交

ゑ至らん乎此理想を懷く者多きに至らん乎則ち蝦洲柳内君は自から筆硯の勞を慰め大に誇りて可なるへし

明治三十四年十一月二日

米國哲學博士　淺田剛南

Lives of great man all reminds us. We can make our lives sublime.

——Longfellow

豪傑の傳記は皆吾人の豪傑たり得べきを示す、　ロングフェロー

吾人の望む所唯斯の如きのみ、以て序に代ふ

蝦洲生

目次

第一　理想的學生とは何ぞ……一
第二　現今の學生と理想……九
第三　學生の理想……二三
第四　詩人政治家の典型……三二
第五　革命家宗教家の典型……四三
第六　理想的功名心……五三
第七　自ら助くるの人……五八
第八　彼のグレーに學べ……六七
第九　理想的藝術家……七八
第十　見えざるアルプス山……八七

理想的學生

農學士　柳內蝦洲著

第一　理想的學生とは何ぞや

我が親愛する學生諸子、余は先づ筆を本編に起さんとして、余は余が過去に於て公にしたる『二十世紀の學生』『東都と學生』『學生と生活』の三編を通讀せられたる事に對して、多大の謝意を表するの適當なるを思ふと共に、更に『理想的學生』をも充分の注意を以て讀まれん事を望まざる能はず。

理想的學生とは何ぞや、此問題は余程茫漠たる問題にして、近き過去に於ても二三の先輩に依りて、盛に論議せられたる所の者なれども、眞に理想的學生の

眞意義を説明せる者に至ては甚だ少おかりし也、余は今諸子の爲に此問題に向て説く所あるべし。

理想なる文字は近來の一の流行語となれり、曰く理想的政治家、曰く理想的實業家、曰く理想的紳士、曰く理想的文學者、曰く理想的教育家と、理想的の文字は殆ど濫用に近き程多く用ひられつゝあり。近時『萬朝報』理想團なる者を組織して、大に天下に號呼する所あらんとす、而して理想と云へる事は一種の福音の如く一派の人士の耳に響きつゝある也、理想は何故に斯く迄に尊重さるゝや、理想的學生を説く前に於て、先づ理想の主義に對して相當の解釋を下すは最も適當なる順序おらざるべからず。

（一） 理想とは希望に非ず

論者往々理想と希望とを同一視する者あり。此輩はシーザーが羅馬統一を希望せしを以て、シーザーの理想は羅馬統一にありと爲す者也、ビスマルクを以て

理想家とおし、ナポレオンを以て理想家となす者也、焉ぞ知らん此れ理想に非ずして、希望おりし事を、希望も下劣なる希望にして野心おりし事を。理想と野心とは相去る事、天壌も啻ならざる者也。論者の誤れる事往々斯の如し。若し彼等の云ふが如きもの、果して理想おりとおさんには、平沼專藏君も理想を有すべく、車夫も馬丁も亦理想を有すべし。理想は斯の如き卑近おる者に非る也。

此輩は亦動もすれば理想の高低、尊卑、大小を云はんとする者也、曰く低き理想を去り、高き理想を持せよと。大理想あれ、小理想あるべからずと。卑しき理想を捨てゝ尊き理想を取れと。誤れる哉、理想には高低、尊卑、大小の別あるなし、何となれば理想は現實を離れて存すべき者、高低、尊卑、大小等の如き現實の者を離れて始めて得べき者おれば也、故に理想と云へば自ら高也、自ら尊也、自ら大也。斯の如き差別は希望に於て始めて云ふべき者にして、決して理想に

於て云ふべき事に非る也。

（二） 理想は空想に非ず

然らば理想は空想也と云はんか、稍當れる節あり、されど仔細に觀れば理想は空想を去る甚だ遠き者也。

理想は現實に非ず、空想も亦現實に非ず、既に共に現實に非ず、然らば相似たる所有るに非ずや、然り、豈それ然らんや。

空想は空想也、待てども終に來らぬ者也、欲すれども終に得ざる者也、語を平くして云へば、空想とは棚から牡丹餅の落下し來るを待つが如けん、之れ如何に待ちたりとて、如何に熱望したりとて、終に得可からざる所の者也、理想豈斯の如き者ならんや。

理想は望めば得る者也、よし一年二年の後に得べからずとするも、五年十年の後に得ん、五十年百年の後に得ん、千年万年の後に得ん、之れ即ち理想也。得

ると得ざるとが正反對を意味するが如く、空想と理想とは正反對也。

（三） 理想は現實に非ず

時、之を分て過去、現在、未來に分つ事を得るとすれば、理想は何れに屬すべきか。我等人類は到底過去に生活する能はず、彼の虫魚の類と雖も、亦過去に向て進むべからず。然らば現在か、未來かの二ならざるべからず。

現在に生活する者は、現在に安ずる者也、無學なる者は、何處迄も無學を以て安じ、貧乏なる者は何處までも貧乏を以て安じ、終に現在より頭を抽ずる事能はざる者也、然るに理想なる者は現在に安んぜざる者也、然らば未來に生活する者ならざるべからず、現在と未來との異なるが如く、理想は終に現實に非ざる也。

以上は理想の消極的解釋法也、更に積極的に理想を解釋せば如何。

一言にして之を說破せば、理想とは希望と空想との、より大なる者也。即ち

大希望＋大空想＝理想

亦一面より云へば希望と空想とを高くしたる者也。即ち

高希望＋高空想＝理想

とある、然れども決して眞正なる理想の解釋に非ず、唯幾分か理想を解釋するに於て、便利ある方法たるを失はざる迄也。

大希望とは即ち現在を離れて、將來を望む者にして、理想の一種なるものたるを失はず、大希望と雖も、或は大政治家たらんと云ひ、大實業家たらんと云ふの大希望に非ずして、自ら品性を磨き、其操行を嚴にするを云ふ也、中江兆民氏『一年有半』に於て、理想團に與へて曰く、

○理想團の本趣とする所は余未だ其詳を得ずと雖も、然かも人々自ら修明し相共に名節を砥礪し、會合約束の微と雖も寸時も違ふとなく、一言すれば君子となるとを求めて怠らざらんとするに在る可し、是れ善志也、夫れ政黨既

に彼れの如くなる時は、所謂宣言と云ひ政綱と云ひ、皆唯空言を臚列するに過ぎずして、人民たる者己れ自ら恃むに非ざれば、復た政治家に恃む所なし、理想團の必要ある所以ある耶、既に理想團と云ふ、縱令其勢今日に行ふ可からざる者、即ち純然たる理義の正の如きも、之を口にして之を筆にし、他年他日必ず之を實行に見るとを期するある可し、即ち自由、平等、博愛、其他萬國と隔離する所の境界を徹去し、干戈を弭め、貨幣を一にし、萬國共通の衙門を設け、土地所有權及び財產世襲權を廢する等の如きも其請求中に在る可し、是れ大志也、夫れ或は縲紲の苦と雖も辭せざるを期するなる可し或は理義を解せざる狂漢の匕首を避けざる可し、夫の某黨員某が區々たる一椅子を喪ふて、氣沮み心眩し、遽々然志を飜へし、十數年の交友を棄去りて政黨に歸歸したるが如く、世俗の虛榮を慕ふ無義無殘の徒の集合に非ざる可し、果して然らば團員諸君、諸ふ加餐せよ、余も亦石碑の後より他日手を昂げ

て之を視する有らん

と、『君子と成らんとする事を求めて怠らざらんとするに在る可し』と云へる者眞に理想の眞意義あらざるべからず、余の理想的學生と云ふ者は即ち君子と成らんとの望みを抱ける者を云ふ也。

亦一面より論ずれば、理想は完全、或は完全に近き者を意味せり、然れども完全は人に於て望むべからず、君子亦缺點あり、完全は到底望むべからず、理想は望むべからざる者を望むに非ず、故に理想は完全に近き者を指す、理想的政治家は完全に近き政治家也、理想的實業家は完全に近き實業家也、從て理想的學生は完全に近き學生也。余は即ち完全に近き學生たらんには如何にして可なるかと云へる事を敎へんとする者也。

第二　現今の學生と理想

現今の學生の通弊は即ち放蕩遊惰に流れて、毫も勤勉の風なきにあり、青年重ねて來らず、時に及で快樂に耽るべしとは、青年の一理想となり居れる也、知らず彼等は何故に斯く勤勉の風なきか、怪しむべき事に非ずや、云ふ迄もなく學生は次代の國民也、次代の日本は即ち今日の學生に依て組織せられざるべからず、今日の元勳と稱する者殆ど盡く六十を超え、死の手は彼等の手を握りつゝあり、彼等の死期漸く近からんとす、彼等死しての後の天下は、今日の學生の天下也。

次代の政治家、次代の實業家、次代の敎育家、是等は盡く今日の青年の未來也青年の前途は唯光明あるのみ、唯希望あるのみ、從て青年の責務眞に重しと云はざるべからず。

思ひ見よ、今日の元老と稱すべき者は決して放蕩遊惰にして今日を得たる者に非ず、實に刻苦勤勉して今日を得たる者也、身を微賤より起して名を擧げたる者には、一人も遊惰放逸なる者あらざりし也。

請ふ彼の古河市兵衛氏を見よ。

古河市兵衛と云へば何人も其大鑛業家たるを知らざる者なし、氏は實に一の奴僕より立身せし者たる也。

氏は京都在、岡崎村の豆腐商木村某の二男あり、九歳のとき出て丶京都の縫物師美濃屋忠助の僕となれり、居るあと一年半許にして家に歸り、父の手だすけをなせり、氏の美濃屋にあるや、腕白を以て叱らるゝあと屢々なりしが未だ嘗て一回の虚言を構えしことなかりけれは、そが取引先に於ても、氏が無邪氣にして、よく僞らざるを稱せざるはなかりしといふ、氏は十八歳のときか、叔父なる木村某を奥州なる盛岡に訪ふて、其身を托するあとゝなれり、

氏が岡崎村を出て丶、盛岡にいたるの旅費は、氏が日々父の手傳をなして得たるところのものにして、僅かに三分二朱のみなりしといふ、氏は叔父の許にありて叔父が貸金の催促などの事を扱ひしが、よく辨するとの評早く盛岡市中に起りければ、鴻池支店に備はるゝあとゝなれり、氏はあゝにありて大に信用を得たりしが、故郷なる父の命によりて、一旦岡崎村に歸るあとゝなれり、然れども轉びてもたゝは起きぬ氏の氣性とて、其歸るさに南部紬や片栗を仕入れ、併も途中其身は井上久七郎氏の槍持となりて歸りしかば、一文の旅費を要するあとなく、且仕入れ品は、無賃にて京都まで運びたりしといふ、氏は二十三歳のとき、叔父木村氏の勸によりて古河氏の養子となれり古河氏は其名を太郎左衛門と呼び、小野組の番頭にして、江州の人なりき、氏は父と共に小野に仕へて屢々福島に下りて生絲の買入れをなせしが、其機敏なるあとはよく、養父を感ぜしめしといふ、(實業家立身談)

と、以て氏の少時の一斑を知るを得べし。

嘗て希臘の奴隷にてクレチンある者ありき、彼は美術家を以て終生の目的となせり、彼は身命を投じて、一の彫刻をなさんと欲し、他日時の大美術家フヰデイアスの賞賛を得、執政官ペリクリースの賞辭をも得んとして、彼の心も体も盡く一の彫刻の前に捧げたり、然るに不幸にして、其時一の規則は政府より發布せられたり、そは即ち奴隷は身を美術に委ぬべからずと云へるなりき。

嗚呼、彼は如何に驚愕の念に打たれたるよ、彼は失望の極、將に死せんとせり死！　之れ彼れに取りて最も賢き方法たりし也。

彼に一人の妹あり、其名をクレオニーと云ふ、彼女は兄と共に其の悲みを同ふせり。彼女は窃に祈りて曰く、オー、アフロダイトの神！　ジアスの神！　不滅なるアフロダイトの神！　我女王！　我主！　願くは我友とならせ玉へ、而して亦我兄の友とならせ玉へと、彼女は甚だ熱心に斯く祈れり。

彼女は祈りたる後、更にクレオンに向て曰く、『兄上、請ふ彼の穴藏に行きませそは甚だ暗けれども、妾は火を點じ、亦食料を運ばん、而して兄上の彫刻を繼け玉へ神は我等の友となり玉はん』と、クレオンは穴に入れり、而して何人もそを知る者なかりき。

アテンスのアゴラに於て美術展覽會は催されたり、ペリクリースは其妻アスパシヤを携へて會長の席に就けり、其両側には、フヰディアス、ソクラテス、ソフヲリース等の美術家、哲學家、詩人居列びたり。

出品物は其前に陳列せられたり、流石は美術國の美術展覽會、何れか美はしからぬ者あるべき、されど殊に際立ちて見ゆる一彫刻物あり、そを見たる目には他の出品物は殆ど顔色なからんとす、滿場の人々、嫉妬を以てそを眺め居たりき。

『何人の作ぞ？』

『出品者は何人ぞ?』

そは口々に叫ばれたる所なりき。

『思ふに其作者の出でざるは、奴隷なるが故ならん』

と、何人より發せられたりとも分らぬ其聲の未だ終らぬ中に、一人の少女は捕吏に捕へられて、ペリクリースの前に引かれたり。

嗚呼、少女! 彼、何人?

ペリクリースは嚴かなる口調を以て曰く

『汝は此彫刻物の作者を知れるならん、包まずに語れ、語らずんば汝の爲に不利ならん』

と、少女の答は如何、滿場手に汗を握れり。

『……』

ペリクリースは再び語を和げて

『請ふ語れ』

……』

緘默の彼女は終に緘默を以て終れり。ペリクリースは

『さらば止むを得ず、法律の命ずる所に從ひて、少女を獄に投ぜよ』

と、嗚呼、獄! 少女は安如として其命に從ふべき也。時に一箇の少年あり、群集を排して出でたり、彼はペリクリースの足下に伏して叫べり。

『執政官閣下、願くは少女の罪を許せ、彼女は余の妹也、犯罪者は余也、彫刻者は余也、而して余は奴隷也』

と、會衆は騷ぎ出せり、叫べり、喚けり、大叫喚! 大紛擾! 大號呼!

流石にペリクリース、彼は屹然として立てり、靜かに會衆を瞰下して曰く、

『會衆よ、余が斯くてあらん限りは、彼は獄中の人にあらず。請ふ彼彫刻を見よ、アポロは其に出て、希臘には不正なる法律以上に或高尚なるもの〻存する

事を示し玉ふに非ざるか、法律最高の目的は美を發揚せしむる事に非ずや、アデンス若し後世の記憶に存すべしとせは、其は必ずや美術に熱心なりし事に依りてに非ずや、少年を獄に投ずる勿れ、請ふ彼をして我傍に來らしめよ、來れ少年よ』

クレオンは滿目の中心点に立ちて、アスパシヤの手にせる橄攬の榮冠を其頭に授けられたり、妹も亦許されて、アスパシアより接吻を受けたり。

此れ何人？　嗚呼、アポロの神の寵兒、クレオンに非ずや、而して其妹クレヲニーに非ずや。

嗚呼、クレオン！　勤勉の權化！　熱心の化身！

嗚呼、古河市兵衛！　勤勉の權化！　熱心の化身！

セス、ロウ嘗て云へる事あり、

今日産業界の將帥たる人を見渡すに、多くは貧賤なる小兒より身を起したる者なる事を知る也。

と、豈獨り産業界の人のみならんや、政治家然り、教育家然り、詩人然り、小說家然り。而して盡く勤勉と熱心とを以て事を爲せしものに非ざるなし、勤勉と熱心、之れ青年成業の楷段に非ずや。

人は云はん、クレオンは勤勉の權化也、熱心の化身也、而して古河市兵衛氏は亦熱心と勤勉とを有せり、然らばクレオンと古河氏とは同一の人なるか、同一價値の人なるかと、然らず、大に然らず。

古河氏は何物を望めるか、氏の希ふ所は富貴に非ずや、クレオンは何を望みしか、彼の望みし所は古河氏と同じく富貴なりしか、否、彼は實に一の理想を有せし也、彼の前には富も位も何のその、彼は唯尊きアポロの女神の前に隨喜渴仰せり、彼は美術に其身命を犧牲に供せし者也、之れ一大理想に非ずや。

嗚呼、クレオン、彼は眞に理想を有せし也。

彼は實に完全に近き美術家なりし也。

日本の學生諸子、諸子は此東西の二偉人の中、何れをか偉なりとして諸子の師となさんとするか、此れ余の切に聞かんと欲する所也、思ふに諸子の望む所はクレオンに非ずして、古河氏なるに非ざらんや。滔々たる日本の學生は盡く然るに非る乎。

現今の青年は果して何事をか爲しつゝある、正岡藝陽氏は其最近の著述『嗚呼賣淫國』に於て、青年社會の狀態に慨して曰く、

東都に於ける學生は果して何事を爲しつゝあるか、汲々として修學に餘念なき者もあるべし、或は苦學力行、他日の大成を期せんとする者もあるべし、されど其多くは日に月に墮落の階梯を進み、益々罪惡の淵に近きつゝある者也、彼等は女義太夫等の者に心醉しつゝあり、彼等は醜業婦に惑溺しつゝあり、彼等は男色を弄びつゝあり、彼等は矢場女なる者に戲れつゝあり、數へ

來れば殆ど其煩に堪へざるべきも、之等は明かに彼等が墮落の例證の第一に擧ぐべき者にして、其一斑は以て全豹を窺ふに足るべし、彼等の醜行、一々數ふるに堪へざるも、換言すれば彼等は買淫學生也、而して賣淫學生也、嗚呼、賣淫、此に竊盜來り、詐欺來り、墮落終に來る。

と、當今の學生に一大鉄槌を加へ、更に其筆鋒を鋭にして曰く、

唯一の淫の賣買あり、之に依つて落第あり、從つて試驗にカンニングを用ゐざるべからず、貧乏あり、茲に詐欺と窃盜とは伴ひ來る、此に於てか、高利貸との關係あり、次で來るべきは自暴自棄のみ、墮落は此に至りて其頂上に達せる者也、次きに監獄あり、無理情死あり、斯くして有望なる青年學生の生涯は脆くも終りを告ぐるもの也、唯斯の如し、彼者の墮落に至る楷段も、其終局も至極簡單に終了せらるゝ也。

と、嗚呼、學生社會の腐敗、こゝに至る、眞に悲むべからずや。

此に於て思ふ、當今日本の學生なる者は、彼の理想に殉せしクレオンを去る事甚だ遠き者なるを。

此に於て思ふ、當今の學生は、彼の勤勉なる古河氏を去る事亦甚だ遠き者なるを。

彼等は尺八に勤勉也、月琴に勤勉也、放蕩に勤勉也、見るべし、彼等は古河氏を去る事甚だ遠き者なる事を、況やクレオンをや。

青年學生に理想あれ、此れ多くの人々の絶叫せる所也、嗚呼、此絶叫、此聲徒に高くして一人の大理想を抱きて來る者なきを如何、彼等は常に政治家たらんと云ひ、實業家たらんと云ふ、而して何が故に政治家たり、實業家たり、美術家たらんとするかに至ては何等の答ふる所なし、唯彼等は漫然として斯く云ふ而已、若し彼等をして目的を達せしむるも、亦必ず今日の紛々たる俗政治家、俗實業家、俗美術家を以て終らん、何が故に然る乎、彼等

に理想なければ也。

『青年觀』著者嘗て曰く、

現代の青年を觀察するに、徒に大言壯語を弄して、勇壯快活を衒ふのみにて何等の理想を有せず、何等の目的をも有せずして、曖昧なる功名心、幼稚なる慾望を以て、無意義の中に幸運の來らんとするを俟つもの多し、而かも渠等の理想を有するの部分に於いても、一家經營、家内繁昌の以外に大なる理想を把持しゆかんとするが如き勇氣あるもの甚だ少しとせば、青年の前途頗る憂慮すべきものあり、吾人は必ずしも生活問題を無視せよと云はず、將た又學位を以て無用のものなりとは云はず、然れども、生活問題よりも、學位よりも深く理想の高大ならんことを望むもの也、諸氏にして唯平凡なる一紳士に終らんとするものならば、吾人は微笑して何事も云はざるべし、然れども、革新の使命を帶びて現はれたる使徒なりとすれば、決して默々の中に

之を看過すること能はざる也、請ふらくは、まづその理想を大にせよ、高くせよ。而して美人を天の一方に望みつゝゆけ、美人とは何ぞ、曰く革命の天女也。

と、我意を得たりと云ふべし、故に曰く

當今學生間の最大欠陥は無理想なる事也と。

第三　學生の理想

既に學生は一の理想なかるべからずと云へり、余は筆を進めて更に異なる意味に於ける理想的學生に就て述ぶる所あらん。

其先決問題として先づ理想に就て更に異なる方面より一の解釋を與へざるべからず、嘗て久津見蕨村氏、『理想の意義』と題して論ぜし事あり、以て參照すべし。氏は曰く『第一理想は想像に非ず』と、其理由に曰く

人間にして双肩に羽を有し、空中を自在に飛行するに到らんことを想ふ、此類の思想は果して理想と云ふべき乎、是れ雪月花の三景を同時に眺めんことを想ふと異ならざるの理想にして、所謂想像なり、如何にしても現世界に於ては實現する能はず、又實現の標準ともならざるものなり、理想は決して斯の如く實現し能はざる空漠たるものに非す、隨て一夜にして富貴の身となり

一日にして大聖の人となり得べきを想ふが如き、反掌の間に藩閥政府が忽然として覆へるべきをとを想ふが如きの類は、是れ必ずしも理想にあらず、唯夫れ無知の想像なる耳。

とて理想と想像の混同すべからざるを云ひ、第二に理想と願望とは相似て甚だ異れるもの也とて、左の如く云へり

明日晴天あらんをとを願ひ、來年豐作ならんことを望む、是れ吾人の常に想ふ所なり、此の類の思想の内には自由、幸福、快樂を希ふものも亦含まる、而して市町村會、帝國議會の正直あらんことを望み、廉潔ならんをとを願ふは、即ち此思想の一なり、然れども是れ唯願望のみ、理想とは異なれるもの也、若し夫れ之を以て理想とせば、醜業婦に戯るゝを快樂とし、之を願ふの人も亦是れ理想あるの人と云ひ得るに到らん、理想は斯の如き自己の願望を指すにあらざる也。

と、此れ稍もすれば同一視され易きものにして、『汝に理想あれ』と云へば、直に『汝に願望あれ』と云ふが如くに考ふる者あり、此差は第一章に於て余の述べたる所也、氏は更に理想と幻影との別を論じて

星亨氏が地獄に於て、地藏菩薩の敎化に感服し、閻魔大王の勸めに從ひ、再び娑婆に還り來りて、東京市に大善政を布たるを恍惚の間に見るあらん乎、是れ幻影の極端なるものなり、之を理想と誤認するものなきや必せり、然れども伊藤侯が斷然藝者狂を止めて、大清潔の人となり、眞誠に立憲政治有終の美をなすに盡瘁するをとあるべきを想ふ、今人の中必ずしも絶無にあらず然れども是れ星亨再來の幻影と一般なるものにあらざる乎、何等の刻苦勉勵する所もなく、又修養鍛錬する所もなくして、突然に道德家となり、君子となり、以て立派なる理想の人たるを得べしと想ふが如きは、是れ幻影を以て理想を誤まるもの也、理想は斯の如く架空のものにあらず。

と云へり、此に依て見れは理想は決して架空的の者に非ずして必ず實現し得べき者ならざる可からず、氏は更に理想と概念を論じて

人とは四肢五官を具へ、現在の社會の規則作法に從ひて、衣食住の事に勞動するもの也、あれ人なるものを一應說明したるなり、然れども畢竟は唯人と云ふものゝ概念のみ、現に然ありと云ふことを說きたる耳、人の以て人たるべき所以には及ばず、即ち現然の事を語れるに過きず、人は必ず當に然あらざる可らずと云ふ當然の道理を明にするには甚だ遠し、此現然の說明を以て理想とは云ふ可からず、理想は斯の如き事實の說明的理想にはあらざるなり。

と、氏は更に理想と古人との最も興味ある問題を捕へ來りて、縱橫左の如く論破せり、

理想に似て非なる諸種の思想は、皆之を區別し了りたり、之れより理想の意

義を云はん、之れには古人の說を借るゝと良しとす、プラトーは理想を万物の根本なりとせり、其意味は此世界の總ての事物は、其根本に完全なる原型ありて、而して成りたるもの、其原型即ち理想なり、理想は最も完全なるものにして、世の事物は其寫象なれば不完全を免れずとあり、ヘーゲルは亦理想を眞理ありとせり、即ち理想は事物の當に然あらざる可らざる所以なれば也孔子が必ずや刑なきに到らしめんと云へるは、プラトーが完全なる國家には刑罰なしと云へると同一意にして、俱に憲法上、政治上立法上の理想とすべき所、國法は此理想が原型となりて現はれたるもの、此理想に近かんとして歩むものたらざる可らず、又一個人の自由は各個人の自由と並立せざる可からずと云ふは、立憲政治の理想なり、現在には然らざるゝとあるも完全の憲法政治は必ずや是に到らざる可からず、以て理想は事物の當に然らざる可からざる所以の眞理なるを知るべし

と、曰く『理想は眞理也』と、曰く『理想は万物の根本也』と、即ち余が前章に於て『理想は完全を意味す』と云へる者と同一也、然れども人は決して完全なり得べからざるが故に完全に近き者と云へる也。氏は更に理想は實現し得べきや否やに就て左の如く云へり

或は云はん、理想斯の如きものならば、其の實現は遂に見るを得ざらんと、必ずしも然らざる也、希臘の名匠『フヒヂアス』がヂユピターや、ミチルバの塑像を作るの前には、世に其摸型たる物ありしにあらず、唯其心の中に一の其の原型となるべき雛形を想ひ浮べたる耳、之れに依りて彼れの手は導かれ彼の技は振ふことを得たりし也、而して其の想ひ浮べたる雛形即ちプラトーの所謂理想にあらずや』と是れ羅馬の學者シセロの語れる所あり『畫家が筆を下すの前には、必ずや心に其原型を作る、故に描く所は其寫象にして、原型即ち理想なり』と是亦羅馬のセヂカが云へる所なり、藝術の上に於ては理想

の實現せらるべきを以て當然とす、他の事に於て亦然らざるの理なし、孔子は仁義の理想の實現、釋迦は慈悲の理想の權化、基督は愛の理想の發揮ありと見るを得べからずや、然らば即ち吾人古聖と相去る甚だ遠しと雖も、而かも心に社會人心の當に然あらざる可らざる所以の雛形を作り、以て今の社會人心の矯正を謀る、必ずしも理想實現の期あしと云ふ可らず、西哲既に『理想は世界の教導なり』と云へるにあらずや、世人は理想の徒に高遠紆曲のものにあらずして、必ずや實現すべきものなるをを知る。

と曰く『理想とは雛形也』と、曰く『理想とは世界の教導也』と、余が說と大同小異也。以上の論を概括すれば即ち

一　理想は想像に非ず
二　理想とは願望に非ず
三　理想とは幻影に非ず

四　理想とは概念に非ず

と云ふにあり、而して亦

一　理想とは万物の根本也

二　理想とは雛形也

三　理想とは世界の敎導也

とて理想の大鉄案を下せり、理想をして眞に斯の如き者ならしめば、其中に二箇の大なる意味の含まれある事を知らさるべからず、そは即ち左の如し。

第一　理想とは万物の根元にして、眞理を指す者なる事

第二　理想とは即ち雛形なる事

然らば所謂茲に論ぜんとする所の理想とは如何なる者ぞ、此二者の中何れをか指せる者ぞ、曰く二者何れをも包含せるもの也。

余の既に學生に理想あれと云ひしは即ち前者の理想(眞理)あれと云ひし者にして、今後論ぜんとするは即ち雛形としての學生也、換言すれば理想的學生は雛形としての學生也、典型としての學生也、モデルとしての學生也。

更に以上の意義を適切に云ひ現はせば、學生の完全なる者也、余は後章に於て如何なる學生が完全なるかと云へる事に就て述ぶる所あらんとする者也。

詩人、政治家の典型

學生は學校にて學ぶ以外に於て必ず自己の品性を養成し修練する事に力めざるべからず、蓋し人に尊むべきは其手腕の偉なるに非ずして其品性にあれば也。品性は人の生命なれば也。

古今品性の人を求む、蓋し其人少しとせず。

ヴヰクトル、ユーゴーは即ち其人に非ずや。

グラッドストーンは即ち其人に非ずや

オリヴァー、クロムウエルは即ち其人に非ずや。

ジョン、ウエスレーは即ち其人に非ずや。

以上四家は即ち品性の人にして悉く余輩の崇拜する人物也、今諸子の爲に、其人物の一班を紹介して、諸子が琢磨に資する所あらんか。

ヴヰクトル、ユーゴーは詩人也。グラッドストーンは政治家なり、クロムウエルは改革家也、ウエスレーは宗教家也、而して盡く人中の雄なる者也。ユーゴーは如何なる人物なりしか。

彼は佛蘭西革命當時に生れたる偉大なる人物なりし、彼の生涯は漂泊を以て閲かれたりき、彼の長じて詩人となるや、彼は尋常一樣の詩人と趣を異にして、實に正義、人道の上に於ける詩人なりし也、蓋し彼は父としてユーゴー少將を戴きたるが爲に、彼も幼にして陸軍士官養成所に入れられたれども、彼は終に自己の長ずる方面に向ひたりし也。彼は當時壯語して曰く、

斯の世紀と與に生れたる新時代の中には、大詩人將に現れんとしつゝあり尚數年を待てよ。

と、彼は自ら此抱負を以て詩人となれり。彼は年若くして、『保守文學』なる一雜誌を發行したれども、それも忽ちにして倒れたり、されど彼は進歩したる

が上に進歩し、生長したるが上に生長せり、彼は終に其著數十種を公にせり。其中にて有名なる者は、

バクヲヤルガル	ハンヂーランド	死刑者最後の日
ノートルダム	クロードギユー	悲慘

海の勞働者　九十三年

等なりとす、こは盡く小説にして、其他の詩に至りては數ふべからず。

彼をして單に以上の小説家たるに止まらしめば、彼は一個平凡の人物のみ、然れども彼に偉也とする所は、其小説に非ず、其詩に非ず、全く其品性にあり。

彼は政治家としても亦偉大なる人物也、彼は自由、正義の爲には、あらゆる者を捨てたり、詩人としても政治家としても常に正義のため、ユーマニチーのために帝王と戰へり、近世の人物中彼程高大なる者なく、雄偉なる者なく、正義を愛せし者なし、彼の眼は唯正義を見たり、自由を見たり、平等を見たり、ユ

ーマニテーを見たり、而して利を見ざりき、黄金を見ざりき、位を見ざりき。

斯くして彼は實に大人物とおれり。

グラッドストーンは如何なる人物ありしか。

英吉利の大政治家、ウヰリヤム、エワルト、グラッドストーンは千八百〇九年十二月二十九日、リヴープールなるロッドニイ街に於て呱々の聲を擧げぬ。

彼の一家は極めて靜穩和平にして、父子の温情蜜の如かりき、父は議論を好む癖ありて、小供を集めて或問題に就て討議するを此上なき快樂となしたりき、

就中ウヰリアム、グラッドストーンは辨舌に於て雄なるものなりき、一佳話ありヂエームス、プリンスレー、リチャーヅ人によりて傳へらる。曰く

一日トーマス、グラッドストン其客室に黄蜂を捕ふるあり、將に命を致さんとす、父あり、此体を見て暫しと押止め、偖て云へる樣、黄蜂は果して打殺さるべき罪を有するや如何にと、議は斯一問に發して、長時盡くるの期なく、

竟に黄蜂は人々の敵なりと云ふに歸着し、此に初めて是を殺さんとせしに、何ぞ知らん此長時の議論中、押へられたる手布を潜つて、彼は既に早く遁去り、蚊々客室を飛翔しつゝあらんとは、父子爲めに呆然之れを久うせりと、瑣々たる小事にすら議を爭ふあと斯の如し。

と、彼は斯くして後日雄辨家として名を博するの地を作りぬ。

後彼はイートン大學校に入りて學業を勵みしが、彼は其傍ら討論會の辯士として人を驚し、雜誌記者として亦力量を現し、時に國家問題、教育問題に立ち入りて迄も雄辯を揮へり、アーサー、ハラム其當時彼の將來を卜して曰く

よしや我等の運命は如何になり行くとも、彼あそは確に何人よりも芳しき香氣を放つ事必せり

と云へり、嗚呼、英雄は小兒の時代に於て既に英雄たりし也。

イートンの期は年と共に去れり、オックスフォード期は次て來りぬ、彼は此處

にても亦討論會の會長と書記とを兼ねたり、而して亦文墨協會の首領として仰がれたりき、當時ケムブリッヂ大學より數多の學生は來て、オックスフォード大學に向て論戰を挑みたりき、其問題はバイロンとシェレーと何れか優り、何れか劣れるやと云ふにあり、グラッドストーンは此會に於て、縱横論評、確に一方の雄辯家として認識せられたりき。

其後バルマーストン大學に於て一大演説を試み、オックスフォード大學は從來多くの注意を世間より受けざりし人間の自由を大に尊重する旨を述べて、オックスフォードの爲めに万丈の氣焔を吐き、併せて自己の雄辯家としての名を博しぬ。

斯くして彼の大學生活は、燦爛たる成蹟を遺して、終結を告げたるが、當時同窓生の中にありて、彼の成蹟は其唯一と稱せられぬ、同大學にありて、古典科業を終るは、容易の事に非ず、然るに彼はそを能くせしのみならず、數學に在

ても亦其首位を占めたり。

校を出でし彼は、其敬神の念慮を以て、身を宗教界に投ぜんとなしたるが、父の斷乎たる拒絶に遇ふて、其初志を翻へし、更に政治界に入れり、若し彼をして父の言に從はしめば、彼が後年の大經綸は空しく宗教界に埋沒せられしならん。

青年時代のグラッドストーンは實に斯の如きものなりし、政治家としての彼は何を爲せしか。

齡二十三歲、既に入りて國會の一椅子を占領せり、國會に入りて間もなく當時の殖民大臣スタンレー氏は、殖民地奴隷解放の決議案を提出せり、こは固より英國に取ての大問題にして、亦世界に於ける人權の大問題也、議論沸騰、滿場轟々として何時果つべしとも見へざる時に當りて、一の朗々たる聲は議場の一角に聞へぬ。

議長！

議長は氣付かざるにや、平然として見向きもせず、再び

議長！

これ實にグラッドストーンが國會に於ける第一の聲なりき、第一の聲は美はしき聲なりき。

須臾にして嚴乎たる態度、正しき步調は衆人の中心点となれり、彼は演壇に上れり、知らず、彼は何をか云はんとする。

彼は諄々として、奴隷制度の不倫奇刻なる事より說き起して、而して相當の準備をなして後ち奴隷を解放すべしと論ぜり。議場は此新たなる議員を中ば心配げに、中ば好奇心を以て見てありしが、忽ちにして其辯說の流暢の妙を極めたると、其論旨の徹底せるとに威服せり、久しく敵手おくして、稍脾肉の歎ありしジスレーリ氏の如きも、雀躍して其好敵手を得たるを喜べり。

嗚呼、彼が第一の聲は、實に成効の聲ありし也。

斯くして第一の演説に成効したる彼は漸次に聲望を得、此折よりして、恰も朝暾の登るが如き勢を以て、隆々として其地位を高め、まさに英國の政治界に一大光輝を放たんとせり。

其後の彼、即ち商務局長として、出納院長として、自由黨首領として、大宰相としての彼に至ては、多く世人の知悉せる所にして、あゝに贊するの要なし、余は歩を進めて彼の品性の如何を見ん。

老生は最早一般の利益の上に自由黨首領として行動を持續するの要なきを認め候、既に社會表面に相立候事四十二年、今六十五歳にて退隱するは寧ろ適當なりと相信じ申候。

と、グラヴヰール卿に書き送りたりし彼は大宰相の椅子を弊履の如き感を以て捨て、直にハワーデンの城中に退きて、只一個凡々の伐木翁と化し了せり、其傍ら書籍室に古哲を友として、偶々宗教上の蘊蓄を發しては『ワチカン主義』なる一篇の書籍を出版して、大に宗教界を騷し、十二万部を賣り悉くして、歐洲に於けるカソリック諸邦に對して大刺撃を與へたり。

其後亦彼の第二次内閣は成りたれども再び退きて、亦もやハワーデンに伐木丁々の音を漏すのみなりき、彼の死せんとするや、彼は筆を執りて左の句を記せり。

燃ゆるが如き愛國の念は、あれ我が血也、肉也、將た心也、これが爲めには幼時より白髮を至るまで鞠躬盡瘁身命を捧げんと盟へり。

千八百九十八年五月十九日午後瞑す

齡九十

と、以て彼の志を見るに足るべし。

グラットストーンの生涯は徹頭徹尾敬虔なる福音主義の歴史なりき、翁は手腕

の人よりも、信仰の人なりき、其同情には國民的愛憎なく、其行動には性實的曲庇なし、超然たる六十年の公生涯は、實に宗教的政治家の摸範たりし者なりき。

彼は終に十九世紀の薄暮と共に沒し去れり、何人か百年同謝西山日、千秋万古北邙塵の感なきを得んや。

嗚呼、詩人としてのユーゴー、政治家としてのグラッドストーン、あれ日本青年に取て、立身の摸範に非ざらんや。

詩人ユーゴー、政治家グラッドストーン、彼等は眞に青年學生の師友也。

革命家、宗教家の典型

余は青年學生が、以て師表とあすべき人物を、詩人、政治家、革命家、宗教家の中より求めて、各一人宛を得たり、曰くユーゴー、グラッドストーン、曰くクロムウエル、曰くウエスレーと。而してユーゴー及びグラッドストーンに就ては既に述ぶる所ありたり、此には章を改めて、更に革命家、宗教家に就て見る所あらん。

クロムウエルは何人ぞ、彼は何物を爲せしか、而して彼の品性は如何なりしか

英國は古來内亂の最も多き國にして、其中の大戰爭と稱すべき者には、紅白薔薇戰爭、サイモンド、モントホルトの戰の如きあり、而も尙此れよりも大なる内亂は、彼のピユーリタン（清教徒）の戰爭ありき、カーライルは此戰爭を指して、

獨り眞正の世界史を構成するに足るべき、濶大普遍の戰爭の一局部にして、即ち不信に對する信仰の戰爭也

と云へり、而して其戰爭の張本人たりし者は實に彼のクロムウエルなりき。

クロムウエル！

余輩は此名を聞く毎に、巨棍颯然として頭上に鳴るの感おき能はざる也。

クロムウエル！

余輩は此名を聞くと同時に絶大の眞率漢、大朴强漢を連想せざる能はざる也。彼は實に赤裸々の子なりき、自然の子なりき、彼は天眞なる小兒の如き者なりき、而して彼は實に神の愛兒なりき。

彼は何を成さんとして生れたる乎。

何れの國、何れの時と雖も、必ず一の形式なる者を有せざるなし、政治、宗教一切の者、盡く此形式を有せり、形式とは何ぞ、即ち裝飾也、虛禮也、何處、

如何なる時と雖も、亦盡く此形式を有せり、形式豈不必用の者ならんや、然れども此裝飾物たる形式は、時として人を僞善に陷らしむる事あり、人は此形式あるが爲めに、人間本來の性情を埋沒する事あり、今の日本の佛教徒は即ち形式に陷りし者にあらざるか、彼等は一意專心佛像を禮拜せり、然れども彼は禮拜する事を知りて、禮拜の眞義を知らず、彼等は唯手を合はすのみ、讀經するのみ、これ豈形式の甚しき者に非ずや。

今日の日本の基督教徒は亦形式に陷れり、彼等は祈る事を知る、彼等は聖書を暗誦する事を知る、彼等はオ、在天の父よー　と叫ぶ事を知る、彼等は唯斯の如きのみ、それ以上の信仰、それ以上の宗教的熱誠はあらざる也、此に於て多くの罪惡は祈禱する口の下より行はるゝ也、彼等を指して强て信徒と云ひ得べくんば形式的信徒と云ひ得べき也、其他には何等の適當の名稱はあらざる也。

而してクロムウエルの生れたる十八世紀の英國は其最も激しき時代なりき、彼

は自ら其形式を打破するを以て自己の天職と信せり、彼の目的は正直なりき、彼の行動は公明正大なりき。

彼の時代は獨り宗教其形式に流れたるのみならず、政治亦然りき、此に於てか、彼は當時の王たりしチャールス一世に向つて曰く

汝は我より財を掠めて、以て能く之を取るべし、然れども我道義上の主義に至ては、汝之を滅する能はず、裝銃を以て余に迫る幾多の强盜は財を得べし然れども主義に在りては我の有也、又我の造主たる上帝の有也、即ち知る、是は汝の有に非ず、故に余は死を決して、爰に汝に抗し、而して亦汝に背かん、之を概するに其防禦の途上に於て起る所の辛酸苦痛、經告混亂に至ては擧て皆逆擊し、以て脚下に蹂躪せんのみ。

と、彼は實に謀叛せる也。

謀叛！　謀叛!!　謀叛!!!

英國の天下の耳は此一語を以て驚かされたり、須臾にして軍は起されぬ、須臾にしてチャールス一世は彼の爲に弑せられぬ、而もこれ實に正義公道の爲の戰なりき、正しき謀叛なりき、彼は斯くして形式を去り、天下をして神の命ぜし者の如くおらしめんとせり、赤裸々の世たらしめんとせり、彼の目的の一部は確に達せられたりき。

彼の脚下に集りし幾万の壯丁は如何なる者ありしぞ、盡くこれ至誠を以て一貫せる武者なりき、天を敬し、人を愛するの士なりき、彼等は常によき戰を戰へり。

而してクロムウエルの人物は如何。

カーライルの語る所によれば、彼は唯剝き出しの儘、金甲なく、鐵甲なく、裸躰を以て立ち、赤條々たる事物の眞と、面々以て相對し、心々以て相接し、巨人の如く角鬪せし也と。

彼は言語不明にして、語る能はざる豫言者也、彼は口訥にして行雄なる人物なりき、時として彼は狂人に非さるやと思はるゝ事あり、而も中に無限の憂愁を有し、博大なる同情を有し、常に明斷果決をして一の袴とおしたりき、憂愁、煩悶、朴素は確に彼の特長おりし也、此点に於て彼は詩人的の徑行を有せり、而して事に於て躊躇せざる事彼の如きは稀也、而して彼の希望せし所は一切の形式を廢して神政を世に行はんとせし也、彼の人物亦偉とすべきに非ずや。

彼は一方に於て、時の英國の帝王たりしチャールスを弑する程、大膽なりしと雖も、一方に於ては温和平靜恰も小兒の如くおりし也、彼は謀叛を企つる迄は、閑地に在りて、靜に聖書を讀み、田野を友として、悠々日を送れり、殊に青年や村老等に對して親切懇切至らざるおかりしと云ふ、以て彼の人物を知るに難からざる也。

彼は實に斯る資を以て、斯る事業を爲せり、古今の革命家として彼程大なる者

は非ざりし也。

ジョン、ウエスレーとは如何なる人物ぞや。

青年諸子は街上に散策して、美以教會（メソヂスト）おる看板の懸り居る家屋を發見する事あらん、彼は實に其メソヂスト教會の開山也。

メソヂストとは何ぞや、即ち規則を守るの人也、ウエスレーの一派を起すや、餘りに能く規則を守るが爲めに、時人之を嘲りてメソヂストと云ふ、嘲罵の意味を以て用ひられたりし一の侮辱的評語は、今日に於ては全く一の名譽ある教會の名稱とおれり、ウエスレー豈尋常の人物おらんや。

史家の傳ふ所に依れば、其軀幹は肉堅くして、肢體整ひ、其心常に平均を失はず、其智識は百方面に渉り、其記臆の汎くして趣味の多き事驚くばかりにて、其理解力は緻密にして、包括する所甚だ大に、之を廣ぐれは、土耳古帝の陣を蔽ふべし、之を捲けば貴婦人の掌中に沒すべしと云ひ傳へし天幕に似たりと、

以て彼の平凡の人物に非ざりしを知るべき也、監督ニウマン氏は曰はゞヤ！

そは女の握中に沒すべしと云傳へし天幕に似たり。其想像は其光を天の永遠の太陽より借り、其意志の一たび決せらるゝや動かざるおと山の如く、其勇氣は恐るゝ處なく、其忍耐は動く所なく、其溫柔なると婦人の如く、其勉强なると死するまでは休せず、地の廣がる限り、時の續く間は止むを知らざるなり。其雄辯は人をして恐れしめて、又喜ばしめ、修辭整々として一句も變ゆべからず、譬喩巧妙にして人を服せしめ最惡の小人と雖も之が爲めに心を刺されて自ら罪あるを認め、其敬神の念は忠實を以て著れ、全心を以て神を愛せり。

と、ニウマン氏は更にルーテルとウエスレーとを比較して左の如く云へり。

ルーテルは政權と教權とを混同せる法王に對して抗論せり、ウエスレーは、世の不幸の原因となりし罪惡に向て抗論せり。

ルーテルは劍を鞘より脫して、戰爭を起せり、ウエスレーは世をして爭鬪の巷より脫せしめんが爲に、道德上の改革を求めたり。

ルーテルは信仰に依りて義とせらるゝ事を說けり、ウエスレーは羔の血に依りて人は完全なる聖淨に達すべきを說けり。

ルーテルは羅馬法王の過失に抗して九十五條の趣意を宣言せり、ウエスレーは總ての過失や罪惡に抗して教會に二十五ヶ條の問題を與へたり。

ルーテルの事業は四十年間に西歐洲に宗教上の變動を與へたるが、其後其進步に一頓挫を來したり、ウエスレーの事業は二世期間進步の生命を有したり、と云へり、ニウマン氏は稍ウエスレーを揚げんとして、ルーテルを貶したるの嫌あれども、兎に角ウエスレーの大人物たる事は、あれにても証據立てらるべき也。

ウエスレーはウエスレーを評して曰く

其雄辨なることと論理の精しきことは文學に秀づるに足るべく、其統治の才はリチエリウに讓らず、而してたとひ過ちあるにもせよ、世の誹謗を憚らずして自ら以て同胞の最大幸福なりとなせし所のものに全く其力を用ひたる人なり。

と、彼は實に十八世紀の宗教家中、最も大なる者にして、亦最も賢なりし者也、然るに日本の青年學生中には時に、ルーテルの人物を說く者あるに關はらず、一人のウエスレーを說く者なきは何ぞや。怪訝の至と云ふべし。

余は既に學生諸子のために師友たるべき人物四人を擧げたり、以上四家は各方面に於て最も傑出せる人物たる也。

諸子にして若し詩人たらんと欲せば、ユーゴーの如くなれ、政治家たらんと欲すればグラッドストンの如くなれ、革命家たらんと欲すればクロムウェルの如くあれ、而して宗教家たらんと欲すれば彼のウエスレーの如くなれ。

理想的功名心

功名心を排せんとする者あり、曰く功名心は有りて益なき者也、宜しく汝の心中よりそを驅除して、功名に淡に、利を見ること弊履を見るが如くあらしめよと、大に然り、功名心は畢竟、自己を亡ぼし、國家社會を害するに止る、寧ろなきに若かざる也。

然れども一部の人の戀愛を排斥する者あるを思へ、而も一人として戀愛の囚とならざる者ありや、蓋し戀愛は人間天賦の性情より發したる者にして、口にそを排斥するも、心之に從はざるを奈何、功名心も亦然り、非功名心を稱ふる者も、終に人間の天賦の性情には勝ち得る事能はざるを如何せん、功名心非也と云ふも、亦以て如何とも爲し能はざる也。

試に思へ、人は不滿足の器也、一を得て十を望み、十を得て百を望み、百を得

て千を望み、万億兆、更に其希望に際涯なきは即ち人間の希望に際涯なきが故に非ずや、而して之れ實に天の人に命じたる所のものにして、此心おそ實に世の進歩の原動力とも爲るべき者也、而して此心の一部は發して功名心ある者となりて現はれ來る、功名心豈輕ずべき者ならんや。

亦一方より論ずれは、人は完全を希望して止まざる者也、君子は完全ある人たらん事を期し、政治家は完全なる政治家たらん事を望み、實業家は完全なる實業家たらん事を希ふ、おれ人情也、故にバルゥァー曰く

人が其達し能はざる所を望む中は未だ搖籃時代にある者也、其倦て功名心眠るの時は其人が死してあるの時也。

と、完全を希ふの心は發して亦功名心となる、功名心は排すべき者に非ざる也、唯能く功名心の種類を辨知すべきあるのみ。

功名心に二種あり、一を世に幸福を齎す功名心となし、一を世に苦痛を齎す功

名心となす、前者を名けて仮りに理想的功名心と云はん。

ユーゴーも功名の子なりき、エマルソンも功名の子なりき、ルーテル、ノッィスも功名の子なりき。

ナポレオンもビスマルクも亦功名の子なりき、されど思へ、等しく功名心にして其間に多大の差異の存する事を。

ユーゴーの功名心は世に何物を齎したるか、ナポレオンの功名心は世に何物を齎したるか、前者は幸福也、後者は苦痛也。

世の爲めに盡さんとする功名心は世に幸福を齎すもの也、自己の榮達を計らんとするの功名心は世に苦痛を齎らす者也、蓋し多くの場合に於て、世と箇人とは利害相反すれば也。

人は功名心の器也、何人も功名心を有せざるおし、亦有せざる能はず、禁酒會の事業のために粉骨碎身したるウィラード女史は理想的功名心を有したりき、

英國の職工をして美とは何物なるかを知らしめたるラスキンは理想的功名心を有したりき、彼等は斯くして世に幸福を齎したる者なりき。

石川五右衛門も鼠子僧も天一坊も亦功名心を有せりき、されど彼等の功名心は自己の爲に計りて明なる功名心なりき、彼等は斯くして世に苦痛を齎せり。

等しく功名心と雖も、一概に是を排斥せんとするは愚也、理想的功名心は決して排斥すべき者に非ず、寧ろ是を奬勵して可なり。

所謂功名心とは屍の在る處に集る蛆を云ふ。彼れ營々として朝に一塊の屍を抱けども、夕に他の欲望を追うて去る。功名心には些の餘裕なし、一粉の滿足素よりあるなし。常に走り常に捕へんと欲す、寧ろ路頭に斃れて餓膓を晒さらんや、此れ恐くは極端の論ならん、然れども單獨なる功名心の人を毒する實に恐るべきものあり。功名の動機をして、獨りその行くがまゝに行かしむるは、猶ほ瞽者を原野に放ちて、汝ぢ獨り何かに行くべき處に行けよと

命ずるが如き也。如何なる人物に在ても、功名の動機は盲なり。欲望餘りありて眼閉ぢたる猛鷙の如きなり。彼れ僅にこれに依て動く、此れ寧ろ永遠の苦痛を味ふものに非ずや。

と、氏は功名心を排して戀愛を揚げて功名心を非とせり、されどこれ戀愛に對する功名心のみ、決して理想的功名心に就ては一の異議あらざるべきを信ず、功名心あれ、功名心あれ、而して是をして理想的功名心たらしめよ。ヂスレーリは曰はずや

青年にして上を眺めずして、下を見、其精神發暢せざる者は、地上に匍匐すべき者也

と、汝の功名心をして理想的功名心たらしめ、而して世に幸福を齎す者たらしめよ、人類の進歩は蓋し此に依りてあるに非ずや。

自ら助くるの人

馬はよく走るも遠きに及ばず牛はよく走らざるも千里を歩むと、嘗て牛の如き家康は云へり

人の行路は重荷を負ふて遠きに行くが如し急ぐ可からず怠るべからず

とよく渠自身を語り得たりと云ふべし。

諸氏寧ろ牛となるとも馬となる勿れ、由來我が國大發明家大事業家なきは馬多くして牛乏しければなり、近來の人士凡て馬のみ。

立志の源泉の著者曰く

昔しは希臘の哲人數へて曰く始むるは成すの半分なりと眞なる哉然れども始むるは全く成したるにはあらず樹を倒すは最後の一擊に在り勝を獲るは終の數分間に在り天秤の重として磨せしむるは僅かに一粒の差ひに依る有德善美

の生涯を送る惟一の秘訣は之を恒久持ち續くるに在り障碍に耐へ困苦に忍び失意の境遇を經て不屈不撓なるあと肝要あれ只だ永く耐え忍ぶものゝみ最后の勝利を得走る者は多くあれども終極まで忍ぶものは甚だ稀なり人生の行路には中食にて斃れし人々の骸骨の堆積するものあり光榮の月桂冠は只だ辛酸に逢ふて撓まず永久にその最初の精神を持續する人々の頭上に落ち來るものなり。

と、眞によく穿ち得たり、かの羅馬ペリクルス時代、十七世紀、十九世紀等の文明は幾多の英雄豪傑學者技術家等の不撓不屈に依りて得たる成功の集合名詞に外ならず、換言すれば不撓不屈は成功の父母なり。

埃及の三角塔の如き蘇西の運河の如き鉄木眞の遠征の如き一として不撓不屈の生みたる子ならざるなし、父母はまた獨逸の學藝を生み佛蘭西の美術を生み英吉利の强盛を生み、將た亦釋氏ソクラテイスの如き大哲學者を生み、ワツト、

コロンブス、シーザー、ビスマーク等の英傑を生みしにあらずや、實に屈せず撓まず精神一到せば石も羽を呑むとかや、かの四十七義士の復讐も、天野屋利兵衛の不撓によるべく伊藤仁齋の芳名も貧に處して不屈の結果に外ならざりしなり。

而して諸氏の多くは如何、徒に未來のビスマーク、ナポレオン、バイロン、セークスピア、ミケールアンゼロを氣取りて得々たる其志や賞すべきも、幾何の難問に遭へば乃ち口實を設けて曰く予は文學者なり、數學を要せずと。繪畫の試驗に臨んでは乃ち曰く大臣何ぞ風流漢を學ばんやと。而して其結果は如何、落第の悲鳴を揚げ除名の恥辱を取る、それも好し失敗は成功の基かれば大に勇奮猛進すべき筈なるを、反つて失望落膽の淵に臨み忡々として樂まず、遂に志を轉じ、時を失ひ、墮落して一生を不幸に泣くもの比々皆然り、何ぞ其薄志にして、弱行なるの甚だしきや、諸氏よ先づ次の傳記を讀め、恐らくは思ひ半ばに過ぎん。

佛國人バリシー氏は其名を「ベルナルド」と呼び、父母ともに甚だ貧かりければ、嘗て學校の教育も受けたることおかりしが、長ずるに及びて「ガラス」に畫き及び土地を測量することを業としけり、當時佛國の陶器は其製粗惡にして釉藥粟色なりければ、氏は是れが改良をなさんと心かけたる矢先に「イタリヤ」國より精巧なる磁器を輸入せり、氏は見るより飛び立つ思をなせども、如何せん我身富有ならざるが上に妻さへありければ「イタリー」に渡りて其秘を探ることを得ず、是に於てか種々の藥品を求め白色の釉藥と彩色の藥とを探り出さんとろ勉めけり、七日七夜竈の前に座したるまゝにて見詰め居たりし、されど成らざりき、氏謂らく是れ藥料の未たよろしからざる爲なりとて、更に工夫を凝し、友人の助力を乞ひて、僅に物品を調へ竈に投じて火を點ぜり、斯くて藥料未た燒き付かざるに薪また盡きぬ、氏は此時を失ふべからずとおし、板塀を破りて

投げ入れ其盡くるに及びたれども、藥は未た着かず氏は猶少時火力を保たしめざるべからず、此時に當りて金剛石もまた惜からたと思ひければ、己れが坐せる椅子を投げ入れたれども、猶着かず何かあれかしと見廻せど寢台の外一物もなかりければ氏はこれを打ち碎きぬ、是を見る妻子は氏が發狂せるならんと思ひ、泣き叫びて逃げ去りしが、此の最後の火力にて白色の釉藥は始めて燒き着きたり、氏の喜び知るべきあり、されど是は白色の釉藥を付けたるまゝにて、甚だ成功せりといふべからず、氏は更に經驗を積むこと十八年、遂に精良無類の陶器を成すことを得たりといふ。

氏は只一個の陶器屋に過ぎず、而してかくの如く不撓不屈ならずんば名を爲し難かりき、青年諸氏にして假りにも陶器屋を望むものはなかるべく、盡く大政治家大實業家大文學家を希望せらるゝならん、これを望むもの數万人に下らず、かくの如き大望にかくの如く希望者あり、抜群の功名せんとするにはまたそれ

だけ不撓不屈の精神なかるべからず。

人類ありて以來幾千万年、苟くも名蹟を後世に遺せし人にして、その精神なかりしものは斷じて一人もこれあらざるなり、成功を生む父母は不撓不屈の外に他あらざればあり。

若しこれありとせば是は、成功にあらず一時世人の目を眩ましむる詐僞師のみ諸氏は福島中佐の旅行記を讀みしならん、古川市兵衛氏の傳記をも見られしならん、如何に千挫屈せず萬艱撓まず粒々の辛苦を積みて今日に至りしかよ。

宇宙の萬象は凡てこの眞理を余輩に敎訓しつゝあり、見よ

一粒の種子より二葉と成り、若木と成り枝を交へ花咲き實結ぶに至る間、風あり雨あり寒暑あり、よくこれ等を排して撓まず屈せず遂に芳香を發し美容を粧ふにあらずや、デビー曰く、

予が巧なる手工者たらざりしを神に感謝す蓋し予が爲せる有用なる發見は失

敗より得來りたるものなれば也。

失敗の裏には成功あるもの潜めり、成功は失敗を裏返へしたるに過ぎず、然るに世人多くは一事を企て孜々として怠らざるも、一旦失意の事あらんか、俄然自暴して顧みず、直に又或一業を企圖せんと志す、例へば峰巒の絶頂に登山せんとし、平垣なる麓邊は得々として濶歩し行くも、山徑漸く狹み荊棘前面を覆ふに至り、巖角を迂回して徑を失し忽ち狼狽して左顧右眄遂に轉じて他の垣路を索めんと欲するが如し、愚かなるも亦甚だしと云ふべし。知らずや失意の時期は其頂上の近きに至りしを、事業の成功に殆んど手の達せんとするまでに及びしあとを。

諸氏嘗て聞けるあどあらん、天の大人物を造るや必ず一と度は其人を艱難に陥らしめ、而して後この人に賜ふに、英雄豪傑大實業家大文豪家の名を以つてすと、艱難汝を玉にすとは此謂なり、故に諸氏にして失敗の域に陥らんか喜んで忍べ天我れを大人物たらしめんと爲給ふかと又眞に然ればなり、天の殊に芳香と秀麗とを給ふ梅花を見よ、嚴冬雪深く風凛なる間にありて嫣然して花開くにあらずや、梅花にしてこの耐忍なからんか、彼の女は只平凡なる梨花にも及ばざるべし、かの達磨を見よ、彼れにして若し不撓不屈の精神なかんか、彼れは只一個の滑稽翁のみ、而してかくの如く達磨太師の高名を博せし所以は、坐下より苦を生じ睡眠を覺ますべく眼蓋を閉ぢてまで能く艱苦と戰ひし結果に外ならざりしなり

チャーレス、マッケイの詩に曰く

卿若し良圖を畫し　成功に通するまで動搖せず
其心血を瀝すべき艱苦に堪へ、障碍に克たば
卿の時は來るべし　進め眞個の精神よ
卿は必ず酬はるべし　卿は目的を達すべし

フオンテーン亦曰く

汝先づ自ら助け よ然らば天汝を助けん

古人亦曰く

樹根を養へば花を折り實を取るの餘慶を得べし

諸氏は、勇奮突進して、天の汝を助けるまで花を折り實を取るの餘慶を得るまで、屈せず撓まず、世路の大障碍を無盡に蹴破りて、最後の勝利を得べく一歩も他人に負けざらんことを覺悟せざる可からず

彼のカンーヒ歌ク

"When I behold, with deep astonishment,
To famous Westminster how there resort,
Living in brass or stonery monument,
The princes and the worthies of all sort,
Dos not I see reformed nobilities,
Without contempt, or pride, or ostentation,
And look upon offensless majesty,
Naked of pomp or eartky bominatin,
And how a play—game of a painted stone,
Contents the quiet now aud silent sprites,

Whom all the world which late they stood upon,
Could not content or quench their appetites,
life is a ferst of cold fecilitie,
And death the thaw of all oun vanitie,
—— Christolero.

あらゆる階級の王侯貴人が
あるは銅像、あるは石塔と化して
音にきあえたるウェストミンスターの寺に
續々として集まる樣を見るに
あれ等の紀念の品は
ありし昔に引きかへて
人をさげすまず、人に驕らず、又外見をかさらず
儀禮、權勢等の名殘だに止めざるを
あはれ昔は、その住める全世界を以てするも
彼等の慾望を滿足せしむるに足らざりしに引きかへ
兒戲にひとしき一片の石塊もて滿足す
嗚呼人生を冷かなる慾の氷結する所とすれば
死は正に是れ、あらゆる野心の融けて流るゝ所
——クリストレロー

右はクリストレローの詩の一節なるが、讀者はそを讀みて何とか思ふ、『死は正に是れあらゆる慾の融けて流るゝ所』と、之れ實に千古不磨の鉄案にして動かすべからざる眞理ならざるべからず。

一讀、厭世詩人の歌のそれの如くあれども、靜に考ふるに及んで、其中に人生の極意の潜み居る事を發見せざる能はざるべき也。之れと同じき思想を歌ひた

る者にして、詩人グレーあり、彼は曰く「榮譽の途の至る所は墳墓也」と、之れも同一の意を詩にものせし者にして、人生の果敢なきを歌ひたる者なれども厭世詩人の讃言として一概に排斥すべきに非ず、人生も究極する所、終に此處に至るを如何せん。

試みにグレーが絶唱『村寺の墓地』の由來を說かん乎、グレーの『村寺の墓地』は泰西にて有名なる詩なると共に、日本の英文學生に最も能く知れ渡り居れる者也。

グレー、名をトマスと云ひ、粗放懶惰なる父を戴き、温厚篤敬の婦人を母として戴けり、從て彼が後日の大名は父よりも母に負ふ所甚だ多かりし也、グレーは生れながらにして、荏弱なる事女子の如く、峻嚴剛毅なる偉人の面影は彼に見るを得べからざるも、多血多情の婦人的資質を有したりき、後年彼の親友の一人は、彼に就て語て曰く

彼は其性質極めて温和にして、其容貌までも優しく、殆ど男子たるを信ずる能はざる程なりき。

と云はしめたり。

彼は幼にしてイートン校に送られたり、後ケムブリッヂのヘムブローク院に進みたるが當時友として親しかりしものは、時の大宰相ワルポールの子ホーレスワルポール、當時有名なる監督ボルチットの孫、リチヤード、ウエストの二人なりき。

グレーはケムブリッヂを去りて、ワルポールと共に、佛蘭西、瑞西、伊太利の山水に放浪し、時に異鄕の風土の壯大なるに驚き、時に風蕭々たる古戰場を吊ひ、彼の詩靈更に數層の重きを加へたるが、一朝グレーとワルポールとの膠漆の盟の破るゝや、彼が滿腔の友愛を傾注せし者は、唯一人のウエストのみなりき。

一千七百四十一年一月、彼は始めて『アグリッピナ』を作りぬ、而も之れ余りに古調に過ぎ、新しき調とては見るべくもあらざりし。

其年六月、更に『春の歌』を作れり、彼は之をウエストに示さんとして、其許に送るや、悲哉、天地間唯一人の親友は、彼を遣して空しく白雲郷中の人と成り了せり、彼が痛恨の情、亦知るべき也。

彼は一方に於てウエストを哭しつゝある間、彼の師とも友人とも云ふべき彼の伯父ウサリアム、アンドロパスを失へり。

其以前に於て、彼は十一人の同胞を有したりしが、盡く血液の過多ありし爲め恰も將棋倒しの如く倒されたり、血燃え、情熱せる多恨の詩人、如何でか斷腸の思無きを得んや。

此に於て、彼は滿腔の詩思を傾注して、『遠くイートンを望む』の歌を作りて懷舊の情を注ぎ、『ウエストの死を悼む』を作りて、憂愁の情懷を披露し、而して彼は終に有名なる彼の『エレヂー』即ち『村寺の墓地』を作りて、人生の無常を痛歎せり。

『村寺の墓地』

之れ實に千言の傑作也、今其數節を譯出せんか、

入相の鐘無常を傳へ
　風は靜に葉末を渉る
賤の男は疲れて家路を辿り
　唯殘れるは暗黑と我とのみ
おぼろに見へし四方の光景も消え
　大空唯寂たり寞たり
甲蟲は懶げに飛び
　鈍き鳴聲も彼方にて息みぬ。

彼方の藤に覆はれし塔より
　梟は月に號べり
彼處の參差たる楡の樹の下
　此繁れる樹の蔭
累々たる芝生の小塚は
　森の父祖が永き眠りに就けるとあろ。

一讀、先づ凄蒼の感に打たれしむ、彼は斯く先づ村寺の墓地の光景を寫して、後ち徐ろに筆を進めて、

野心をして彼等の必要なる勞作、
　家庭の快樂、神秘の運命を嘲けらしむる勿れ、
虛榮に醉ふ者をして、
　彼等の憐れなる一生を笑はしむる勿れ。

玲瓏たる多くの寶石も、
　深さ知られぬ海の底に秘れ。
多くの花は人に見られずして
　野山に朝の露と消ゆ。

此に眠れる者の中には
　一村のハムプデンもあるべく
無言にして譽なきミルトンもあるべく、
　或は罪なきクロムウエルもあるべし。

と、終に英雄も匹夫も、死して後ち共に一介の塵となるの一大眞理に觸着せり畢究するに、『村寺の墓地』の一篇は人生の追懷記也、死の安心也、以て彼の瞶々たる迷朦者流をして、飜然大悟せしむるに足る者あり。而して滿天下は如何にして此好著を迎へたるか。

此作の梓に上ぼさるゝや、好評嘖々として二ケ月にして四版を重ね、直に十一版に達し、全歐の各國語に飜譯せられ、希臘、拉典、希伯來の古語にまでも譯出せられたり。

余は既にグレーの絶唱に就て述ぶる所ありたり、余は更にグレーが如何なる所より此妙想を捉へ得たるかを述べんとす。

グレーは日本當今の詩人が爲す所の如く決して徒に句を練り、辞を飾りて此美はしき一詩を得たるに非ずして、實に惆悵悲哀なる實境より得來りし也。熟ら思ひ見よ、彼は十一人の兄弟を失ひ、親友ウェストを失ひ、伯父アントロバスを失ひたる事によりて、彼の身邊は實に墳墓を以て圍繞せられたるに非ずや、彼の多感なる情熱は如何に激揚せられたるよ、此に於て天來のインスピレーションシ、忽如として彼の鏞腹に入りし也。

彼は其實境より其妙想を得たり、諸子の取て學ぶべきは此点に非ずや、今の世

の詩人と稱する者、多くは其文字の末技に拘泥し、一人として其實境より高思妙想を得來る者なし、此に余は聲を高くして叫ばん、

詩人たらんと欲すれば彼のグレーに學べと。

グレーは實に理想的の詩人也と。

曩に理想的詩人として、ユーゴーを擧げたり、されどユーゴーは乱世の詩人也グレーに至ては平時の詩人也、ユーゴーの毅魄と、グレーの情熱とを兼備せる者、或は眞の詩人たるに庶幾からん乎。

理想的藝術家

天才の語は近時最も廣く、最も多く用ひらる、所の語也、曰く藝術の天才、曰く政治家の天才、曰く外交の天才、曰く音樂の天才、天才の語の用ひらるゝ事斯く多くして而も一人の天才の容易に出てざるは如何。

文壇にありては天才の語は最も多く用ひられつゝあり、甚しきに至りては『余は天才也』などゝ自ら天才を以て許さ、昂々として眼中儕輩なき者甚だ多し、天才の語の濫用せらるゝ事斯の如し、余試に天才に就て說く所あらん。

バーンスは天才なりき、シルレルは天才なりき、バイロンは天才なりき、グーテは天才なりき、シエークスピーヤは天才なりき、と云へば天才の數甚だ多きが如くなれども然らず、シエークスピーヤの時代とゲーテの時代とは相隔る事數百年、其間に眞の天才と稱すべき者、殆ど一人も出てたる事なし、此に依て

見れば天才は數百年中僅に一人の出づるあるのみ、天才豈容易に出て來る者ならんや。

之を日本に見よ、泣菫も天才也、松魚も天才なりと云ふ、斯の如き者豈眞の天才ならんや、數百年中僅に一人ある天才にして、明治の文壇に數十人の天才を有すとせは眞に喜ぶべき現象なれども、天才は斯く擾々として馬糞の如く途上に轉がり居る者に非ざる也。

よしさらば彼等をして天才たらしめよ、而もシエークスピーヤは彼自身天才たることを知らざりし也、ゲーテ自身如何にして彼自身の天才たりし事を知らんや、シルレル然り、バイロン然り、然るに明治の文士中間々『余は天才也』と稱する者あるが如きは眞に捧腹絶倒の極と云ひ得へき也。

獨逸の音樂家にベートーフェンなる者あり、斯道の大家たる事は普く人の知る所也、而して彼の天才なりし事も亦彼を知る人の同じく知れる所也、而も彼は

彼自ら天才なる事を知らざりし也。

此にかい摘んでベートーフェンの傳を語らん。

彼は獨逸の片田舎ベーデンに生れたり、不幸にして早く父母を失ひ、兄弟とてもなく、友人とては更にあらざりき、彼の生涯を概括して云へば、孤獨は彼の生活ありき、狷介は彼の性癖ありき、不遇落魄は彼の生涯なりき、而して音樂は彼の唯一の慰藉ありき。

ブロウニング夫人嘗て『リテラリー、ダイヂエスト』に於て幽愁の間に日を送りし當時の心情を述べて左の如く云へり、之れ恰もベートーフェンの心の如くありし也。曰く、

今あの身は我生命の外に生活せり、迎へては又送る日々、唯盲目の如く闇の夜に彷徨ひて、宛から墳墓に面を合して立てるが如く、望みと云へるものは一もなく、我本然の心に探り當らず、心を用ふる思想も「我」とは一向に關係

なかりき。道德上にはさまで臆病にはあらざりしが故に遣瀨なき心中の呻吟を人に聞かすに忍びず、されば何人も此心情を酌み知る者あらず。心のうちの思と、又我と我思想とを遠ざけて生命の分け目に一指をだに着くるあとをせざりし等の事は唯神のみ知り給ふ。詩を作る業はふと面白からずなり來りしも、これさへ「我」の外におりて之を爲さんとして爲すに過ぎず。世の人々が如何に我詩を評判するも、「我」には露程も觸れ來らざりし、今にして之を懷へば、幽鬱荒凉の極にして、恍惚の間過て死人の服を着けしに心付きて慓然たるが如き心地す。

と、此心眞にベートーフェンの心の如かりき、彼は眞に死人の服を着けたる者なりし也。

ベートーフェンは斯かる不幸なる生活を續けつゝありし際、更に大なる不幸は彼を襲へり、そは彼の耳の全く聾ひたる事ありき。

思へ、音樂家にして耳の聾ひたるは即ち軍人の劍を奪はれたるが如き者に非ずや、彼は此に於て更に大なる憂愁に陷れり。

彼は止むを得ずして、バーテンの閭里に退き、僅に膝を容るゝに足る許りの陋屋に、いともわびしき生活を爲せり、而して彼は友の無き中に於て僅に有せし一人の友フンメルとも亦隙を生じぬ、彼は斯くして愈賴み少き身となれり。

時にウヰンナにある彼の甥は書を彼の許に致して、彼の速に來遊せん事を求めたり、彼は一條の活路を甥に於て見出さんとして旅程に上らんとせしが、悲哉彼の囊中には一文、半錢の貯へだに非ざりし也。

彼は止むを得ずして、無一文にて遠き旅路に上れり、彼はウヰンナに向てトボ〳〵と崢嶸たる途を辿れり、一日、彼は餓に迫り、殆ど一歩も進み難ければとて、いぶせき賤が家の門前に止り、切に一夜の宿を求めぬ、幸にして家の者共は快くそを承諾し、共に田舍料理に舌鼓打ちし後ち、爐を圍みて、世間話しを

爲しつゝある中、家の主と三人の兒は、客を慰めんとて樂器に打ち向ひぬ、元より客なる人の音樂の大家ベートーフェンある事は知らずして。

父はクラヴェリンに對せり、兒は皆ヴォリンを手にせり。

調子は調ひぬ、四人の樂手は靜に奏でそめけり、されど耳の全く聾ひたるベートーフェンは何ものをも聞く能はざりき。

四人の奏樂手は眉を擧げ、腕を張り、目を瞑し、溢るゝが如き熱誠を以て樂を續けつゝあり、或は高く、或は低く、切々嘈々、或時は急雨の如く、或時は秋風颯然として枯葉を拂ふが如く、聽く者をして感に堪へざらしむ、臺所にありし母と娘とは其調に聞き惚れて、知らず識らず出で來りて、感極つて泣くに至れり。

ベートーフェンは其樂の何物にして、斯く迄に人を感動せしむるかを知らざりしが、此狀を見て曰く

我れ耳聾ひて、此樂を分つ能はざるは眞に終生の恨事也、乞ふ斯くまでに諸子に感動を與へたる樂譜だけにても讀む事を得せしめよ、

と、つと立ち上りて一片の樂譜を手に取りしが、彼は

『アッ』

と一大叫聲を發するを禁じ得ざりき。そも此樂譜は何人の手に成れりし者ぞ。此樂譜こそは實にベートーフェンの大傑作『アグレグレットの曲』にて彼が多年心血を灑ぎて作り成せし者たる也。

一同不思議さうに彼を見守り居たるに、彼いふり落つる涙を拂ひて、さて曰く

『何をか隱さん、我こそは實に此樂譜の作者ベートーフェン也』

と云ひければ、暫時呆然たりし一同は皆頭に冠れるものを脱きて、此大樂師に敬意を表しぬ、斯くて後ち彼自らクラウリベンに對し、少年をしてヴォリンを

取らしめ、一曲を奏せしが、されど彼が世に遺したる最後の調べにてありける也。

其夜に至りて彼は發熱甚しく、暫し戸外の空氣に觸れんが爲めに、朝露を踏み碎きて逍遙せしが、家に歸りたる頃は、太く惡寒の爲に身を震はし居れり。

醫師は來りぬ、されど其望みなきを告げたり、舊友フンメルも亦來りて彼を介抱せり、されど彼は最早何ものをも云ふ能はざりき、フンメルは聽音器を以て彼に語る所ありけるに、彼は漸くにして

『フンメルよ、兎にも角にも、我は一種の天才なりし』

と述べ終りと、其眼は漸く定まり、其口は開き落ち、終に此絶代の天才は白玉樓中の人となれり。

之れベートーフェンの短くして美はしき生涯ありし也、彼は天才なりし、されど彼の天才は死期に至りて、彼自ら能く其天才たりし事を發見せし也、彼は比

較的に幸福なる死を遂げたり、何となれば彼は彼の天才ある事を知りて死したれば也、されど多くの天才は終に彼自身の天才ある事を知らずして逝けり、其天才と其天才に非ざると、其自身に於て何ぞ關せん、人は唯爲すべき事を爲すのみ、天才と天才に非ざるとは亦問ふを要せざる也。

諸子はベートーフェンの生涯を見て何とか思ふ。彼の生涯は諸子に何者をか敎へたる、彼は唯爲すべき事を爲せしのみ、今日の青年が自ら稱して天才ありと云ふが如き、輕佻取るに足らざるものにては非ざりし也。故に余は曰はん、

天才は自ら天才たる事を知らず、人は唯爲すべき事を爲すあるのみ。

と。ベートーフェンは諸子の理想的藝術家として可也。

見えざるアルプス山

昔者ナポレオン、聖ベルナードの嶮を越えて、軍を伊太利の野に進めんとするや、歐洲の列强は笑つて曰く、

車馬未だ通せし事なき途に向て、六萬の大軍を進めんとす、是れ無謀の甚しき者也、而も亦之と共に、軍器硝藥の類をも運ばんとするは、無謀と云ふよりも一種の狂人也。

と、されどマッセナ將軍は、敵軍の包圍する所となりて、殆ど落城旦夕に迫る、ナポレオンは絶倫の大勇氣と、一種の義俠心とを以て、終にアルプス山を登り始めたり。

嗚呼、アルプス！

其名を聞くだに、尙戰慄を禁じ得ざるに非ずや、されどナポレオンと、ナポレ

オンの心を以て心とせる六軍の兵士は、嶮嶽峻峰も物の數かは、唯見る、煙雨の間、槍劍の閃々たるあるを。

驚鳥は脚下に翱り、山羊は驚愕の聲を放てり、軍隊の先鋒は嶮難なる途に遭遇する毎に喇叭を吹きて、そを注意せり、總ての物、盡く非常の注意を以て爲され、嶮岨も終にナポレオンの前には降伏するを余儀なくせられたり。

廿哩に渡れる長蛇の如き軍は、斯くする事に於て一の騷擾を見ざりき、斯くの如き者四日にして、彼の軍隊は既に伊太利の野に充滿せり、嗚呼、ナポレオン、彼は眞に無謀の人なりしか、彼は果して狂人なりし乎。

ナポレオンは眞に勇氣の權化なりき、膽力の化身なりき、殆ど無謀の人、狂人とも見ゆる程大膽なりき。

ナポレオンの率ゐたる軍人は六万而已、古來六万以上の軍を率ゐて遠征したる者、實に其人少しとせず、されどナポレオンの如き大勇氣を有せし者果して幾

人ありや。

ナポレオンは欠点の多き人物也、余は彼の人物を推重するを欲せず、されど彼の勇氣に至ては、あらゆる贊辞を列ねんとする者也、彼は不幸にして其勇氣を誤用せり、彼の勇氣は一として、人類の幸福の爲にするに非ずして、天下に擾亂を齎すが爲に用ひたりと雖も、何人も彼の如き勇氣を持して事を爲す、天下の事何物か成らざる者あらんや、若しナポレオンにして、今少しく聖哲身を保つの明あらしめ、更に人類の進歩に貢献する所あらしめば、彼は實に天下に最も大なる功勳を立てしや必せり、彼は眞に身を保つの方法を知らざりし者也。

寄語す萬天下の青年諸子、諸子はナポレオンを學ばんとせば、宜しく其勇氣を學ぶべし、而して其勇氣をして、實に世界に紛乱を齎すの具に供する事なく、世界に平和と光榮とを齎すが爲に用ゐしめよ。

古人曰はずや、『斷じて行へば、鬼神も之を避く』と、唯斷々乎として直前直行

するあるのみ。

思へ、ナポレオンは死せり、されどアルプスの嶮山今尚存せり、誘惑、罪惡、欲望、これ豈諸子に取て一のアルプス山に非ざらんや。

銘記せよ、アルプス山は至る所にあり、諸子の足一歩、門外に出でんか、惡魔は四方より來りて、諸子を誘ふにあらずや、惡魔の手の誘ふ處は何處ぞ、曰く花柳の巷、曰く銘酒屋、曰く大弓場、曰く酒樓、此等は諸子に取てのアルプス山也、嗚呼、アルプスの山尚越ゆべし、目に見えざるアルプス山は容易に越ゆべからざる也。

人生行路の難き事、眞に山よりも難く、水よりも險也、山尚越ゆべし、人生の行路、容易に越え得可からざる也、而して青年の行路の難き事更に言語の外にあり。

青年の前途は、一方を望めば光明也、一方を望めば暗黑也、光明と暗黑相去る

事僅に一歩のみ、一歩を踏み誤れば暗黑に陷り、一歩を進めば光明に達す、光明と暗黑、固と非常の相違あり、而して青年の目には光明は暗黑と映じ、暗黑は光明と映ず、青年學生の身を誤る蓋し當然の事而已。

地獄と極樂とは隣りせり、そを識別する事容易にあらず、されどそを識別するの明あくんば、其人は直に地獄に落ちん、如何にして識別すべきか、曰く他なし眞心の命令に服從する事也。而して見えざるアルプス山を越えて、直前直行するのみ。

人材欠乏の聲は、屢々余輩の耳に響きたる所の者也、而して今尚響きつゝあり、嗚呼、人材眞に欠乏せる乎、豈然らんや、そは人材の欠乏に非ずして、大勇氣の欠乏に非ずや。

思ひ見よ、日本の歴史ありてより以來、今日の如く多くの政治家を出したる事あし、今日の如く多くの實業家を出したる事なし、今日の如く多くの教育家を

出したる事あし、而して今日の如く、多くの宗教家、多くの詩人を出したる事なし、而も政治家中一人の家康なく、實業家中一人の祖先鴻池なく教育家中一人の中江藤樹なく、宗教家中一人の日蓮なく、詩人中一人の西行なし、あれ抑も何の故ぞや、他なし、一人の大勇氣を有する者なければ也。

勇氣は實に人世に在りて最も高貴なる者也、されど今日の人士は多くは遊蕩に耽り、酒色に溺れ、能く自己の欲望をだも征服し能はざる卑劣漢也、斯くの如き卑劣漢にして、焉ぞ能く世界を征服し得んや。

人材欠乏と云ふ者、所詮、勇氣欠乏の別名のみ。

詩人ローエル曰く、

凡そ此世に世を享けたる者、一人として其爲すべき事業を有して、生れ來らざりし者に非るなし。

と、思ふに青年諸子も亦何物をか爲さんとする者に非るはなかるべし、諸子を

して若し一事一業をも爲さず、世に何等の貢献をも爲さずして碌々として一生を送り、あたら健全なる身体を造糞器たらしめて足れりとせば即ち可、苟も世に何等かの貢献を爲さんと欲せば、須く先づ諸子の大勇氣を養成せざるべからず、

『理想的學生』に筆を起して、諸子に向て多くの注意と多くの忠告とを與へたる余は、余が職分の最も忠實に盡されたる事を信ず、余は此に筆を擱かざるべからず、最後に於て諸子に一の座右銘を呈せん。曰く

見えざるアルプス山を越ゆるに、ナポレオンの心を以て心とせよ。

終

附錄

灝氣天に流れ、金聲地に滿つ。まさに是れ學生諸子が、想を練り、詩美を究む可きの好期、あゝに新聲記者の筆になれる『秋の詩美』の一篇を掲ぐ。熟讀十誦、得る所少なからざる可きを信ず。

秋の詩美

冬木成、春去來者、不喧有之、鳥毛來鳴奴、不開有之花毛佐家禮杼、山乎茂、入而毛不取、草深、執手母不見秋山乃、木葉手見而者、黃葉乎婆、取而曾思奴布靑乎者、置而曾歎久、曾許之恨之、秋山吾者。と額田女王は一首の長歌で判して天智天皇へ御答になつた、『萬葉』時代に斯かる着眼があつたと思ふと、頗る異樣な感じが起る。秋の美を、春の美よりも一段上位に置くといふやうな考へ

方は、一寸目新らしいのである、『萬葉』は一体、人事に關した歌が多いので所謂自然物の人格化が大に行はれてゐる次第だから、直に斷定を下し難い場合もあるが、要するに秋は、春よりも悲しいもので春は秋よりも樂しいものであるとしてゐるやうだ。

『古今』時代に至つては、春の美と、秋の美との特色が頗る明瞭に詠み分けられてゐる、『年ふればよはひは老いぬまかはれど、花をしみれば物思ひもなし』の一首の如きは素より染殿の后の榮華を壽き奉つたものではあるが、自分の身の老境にあるをさへ忘れて了つて最も樂しい、最も悅ばしい人事に同感するといふ際、春の花を對境に持つて來たのは、頗る味ふべき處ではあるまいか、『見渡せば柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり』唯もう春の錦、悲しいとか、哀れなといふ感情は微塵も現はれてゐない、恍惚として、美に打たゝ瞬間のインスピレーションをそのまゝ文字の上に印象したのである、要す

るに、春の部には長閑けさ、美しさ、床しさ、面白さ、といふやうな、思想感情を以て充たされたのが多い、然るに、『月見れば千々に物おそ悲しけれ、わが身一つの秋にはあらねど』の一首の如き、白氏文集の『燕子樓中霜月夜、秋來唯爲一人長』から思ひ附いたのであらうとの説もあるが兎に角、千々の物悲しきを、月に對して訴ふるといふその秋の月を、彼の春の花に競べて見ると、當に對待相を爲してゐるのではあるまいか、『奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の聲聞く時は秋ぞ悲しき』あれ等も、『古今』の歌人が、秋の美に對する鑑賞の態度をよく代表してゐるものゝ一つで、要するに、悲しい、果敢ない、うつろふ、わびしい、といふやうな文字が、秋の部の歌の、形容詞としては尤も多くの部分を働いてゐるのである、即ち春を樂觀し秋を悲觀するといふ結論に歸納し得らるゝのであるが、吾人は寧ろ、『古今集』に於ては春の美を、秋の美よりも一段上位に置いたものだと、敢て斷定しても差閊なからうかと考へる、換言すれば、

春の美＝佐保姫は、人間に怡藉（コンフォート）の福音を傳へる、天使（エンゼル）である、秋の美＝龍田姫は、下界に悲哀（ペイソス）の使命を齎す魔女（ウイッチ）であると、斯ういふ風に感してゐたものだと云つても、甚しき獨斷に陷つたのではあかろうやうに思ふ。

王朝時代の歌人は、先づ右の態度を取つてゐるのであるが、降つて鎌倉時代の觀方（かた）は何うであつたろふか、『平家物語』などを見ると、例の、『沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す』的筆法で徹頭徹尾厭世的調子が響き渡つてゐるのでもあるし、切つたり、突いたりの殺伐な事が主題にあつてゐるからでもあらうが、花の宴などゝいふ、春の美に對する鑑賞の態度は、得て窺ふ事が出來ないのに、而も、『月見の事』といへる題目迄が設けてあつて、德大寺左大將の、舊都の月に乘じて、近衛が原に大宮の御所を訪へる一節を叙し『舊きみやこに來て見れば、淺茅が原とぞあれにける、月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ』の絶唱をさへ誦し出てたとしてある、『徒然草』の兼好法師は、『花はさかりに、

月は隈なきをのみ見る物かは』と悟つたやうで、悟り切れぬ、浮世のまゝならぬ事をその裏面に反映せしめてゐるのであるが、一面より見ればたれあめて春の行衛知らぬといふ其處に、寧ろ同感を表し雨にむかひて月を戀ふ、其態度に、より多く同情を持つてゐたやうに考へられる、結局あの時代は、佛教の影響が著しく、且つ戰亂の絶えあかつたために、世間は全く厭世的思想の潮流に支配され、隨つて、其厭世的思想を託するに尤も都合よく、尤も適當のものであるとして、春の美よりも、寧ろ秋の美に同感して居たものと思はれる、否、美といふよりは、却つて斯う見た方が適切かも知れぬ、春の樂しさよりは、秋の寂びしさが、彼等の氣に適つてゐた、彼等の境遇に似合つてゐた、即ち、春の美を强て秋の美の下位に据えたといふ次第ではない、假令ば、江戸娘の嬌を認めざるにあらぬも、僕は敢て田舍育の野を愛するといふ類ひては、なかつたのであらうか。

更に降つて、之を德川時代の俳諧に見る、俳諧の極致は、所謂『古池や』の寂味であるといふ、『枯れ枝に烏のとまりけり秋の暮』とか『木枯しの果はありけり海の音』とか成程、謂を聞けば禪味とやらがありさうである、今若しあの俳諧者流が、秋の美を以て、春の美よりも一等勝れた地位に置いたものだと假定すれば、そは、寂味といふあとを、美の頂點として、その怪しい立脚地から判斷を下したものだと云はねばならぬ、春は樂しい、秋は悲しい花は見てさへ長閑である、月は眺めてゐて哀れを催ほす、蝶や鳥は人の心を伸び〳〵させるが、虫の音、鹿の聲は、誰しもの腸を斷たしむるやうだといふ考へは、依然として、蟬脫してゐる段ではないので。

以上、隨分大まかな議論であるが、概括して、日本の詩歌、文章に現はれたる我民族の秋の美に對する思想と感情とを見ると、徹頭徹尾、殆んど悲觀的で、厭世的で、寂味、禪味、といふやうな範圍以外には出てないのである、結局、秋

の美を春の美よりも一段劣つたものだとしたか、乃至、秋の寂しさを、春の樂さよりも寧ろ氣に適つたとしてゐた位なので、決して上地位に押進めた譯ではない、況して、彼の額田女王の如く、多少、樂觀的意義で、秋の美を春の美よりも優つたものだとしてゐるのは、稀有なのである。

處が、西洋では、秋の季候を以て自然美の最頂上に達した時、美の當に爛熟したものだと考へて、希望充實（ホープフル）だとか、豊富（アバンダントナス）だとか云つて非常に喜び、樂んでゐるさうで、これ等は素より諸君先刻御存知の事で、敢て事新らしく喋々するの必要を見ないやうなものゝ、さてこの相互に對聚（コントラスト）してゐる原因を考へて見るのは、又決して無益でない――と云つて、今此處で科學的にシステムを立てゝ詳論する事は出來ないが、先つ、歴史的に大觀すると、佛教的思想の影響がかく日本人をして秋を悲觀せしむるに至つた唯一の原因であつて、之に反して、基督教的思想は、西洋人をして秋を樂觀せしむるに至つた根抵の動機では

なかろうかと考へらるゝ、新約全書廿七卷を通じて、秋を悲しいと觀じたやうな文句は唯の一つもない『田は色づけり、汝等収穫（とりいれ）る者を儲れ來れよ』とさへ云つて、即希望豊富の意義に、引用して來てあるのだ、然るに秋の木の葉の落つるとか、露の命だとかいふやうな事に眼を着けるのは、佛教の吾人に教へた處ではなかろうか。蓋し自然美の、藝術美に異なる一の特色は一定の表象（エキスプレション）がないといふ點に係つてゐる、假令は藝術の美は、水難、病難若くは婚姻、出産などいふ主題を撰擇して來て、彼は如何にも恐ろしさうに、もの凄さうに又周章てたやうに、悲しいやうに、觀る者をしてしかく感ぜしめねばならぬ、此は如何にも樂しさうに、悦ばしさうに又耻かしいやうに嬉れしいやうに、觀る者をしてしかく思はしめねばならぬ、即ち藝術美は、一定の表象があつて、觀者の心が、それと相結合せざる限りに於ては、美感は決して生じて來ない、然るに、自然美は、左樣ではない、全くの主觀的で、心に樂む者の眼には、一切の現象

が皆樂しく映し、心に憂ふる者の眼には、山川草木、悉く憂の影を投ずるのである、結局見る人の心々、日本人だから必ずしも秋を悲觀せねばならぬといふ事はない、秋の美は寂味にあるといふのが、必ずしも千古不磨の鐵案ではないのだ、然るに明治の今日、西洋思想の潮流が、文藝界にも、學術界にも、乃至一般社會の上にも流れ込んで、一種新樣の生氣を帶ばしむるものあるにも係らず、依然として、秋の自然美を唯々、悲觀するといふやうな傾向を免れないのは、寧ろ怪むべしてある。

更に、比喩を人事に借り來つて云ふて見ると、春の美は、少年時代の美、春の樂しさは戀愛の甘酒に醉ふものゝ樂しさではあるまいか、見よ、この時春の空はおぼろげなる雲の慢幕で蔽はれて了つて、人間は地上の歡樂に浮かるゝべく、天界の秘密などは未だ全く彼等の前には鎖されてあるのだ、然るに秋の美は中年時代の美、秋の樂しさは、親子夫婦一家團欒の樂しさではなかろうか、見よ、

この時、秋の夜の天は清く水の如く澄み切つて一度眼を擧くれば『無限』の相が直に思索すべく、一大問題を、星の文字で描いてゐるのである、春雨にしつぽり濡るゝと口吟んで、蛇の目の小傘を少し斜めに傾けながら、十二三の、紅いものづくめ綺羅美やかに着飾つた雛妓が、駒下駄の鈴の音もゆかしく櫻おぼるゝ朱欄の橋を渡つて行くといふのが、先づ春の美の集冲点で、黃に熟した垂穗の稻の一束二束、早刈り取つて、田の畦の榛の樹に掛けられてある處へ、泣く乳呑兒を脊負つて來られ、白い肌をくつろげて、玉暖い乳房を啣ます母の、豊な笑顔、あれがまづ、秋の美の最高調を彈ずるものではあかろうか、乃至、學窓に、未來の細君の美しい顏を描き、立派な御館を夢想して、米の價も知らず、お芋の煮えたのもお存じないのが、春の美を代表するもので、出てゝは社會の活舞臺で汗みづくになつて、たんかを切り、入つては、晩酌の御膳の上で、片身づゝ刺突き合ふといふ寸方、酸いも辛いも嚙み分けるのが、即秋の美のそれに似通

ふてゐるのではなかろうか。要するに、春の美は單純である、秋の美は複雜である、春の美は、唯もう嬉れしい、秋の美は、云はゞ嬉しい、悲しい、即ちその單純と、複雜といふ點から、吾人は秋の美を以て、敢へて春の美の一段上位に置かうと思ふ。單に秋を樂觀するといふのみでは淺い、又悲觀するといふのは偏してゐる、結局、悲喜、両面を備へた葛藤美といふ點に、その價値を認めたいと思ふ。

勿論春の美は必ずしも單純ではないと云ふ疑も起る、落花輕く春風に舞ふ、その趣の中に、限りなき悲哀の情が籠つてゐるではないかとの考も浮ぶのであるが、併しその折の物悲しさと、秋の物悲しさとは又自ら味が違つてゐる、行く春は、假令ば處女の最後であつて、秋の暮は、先づ偉人の臨終だとも云ふべきであらうか、更に他の言葉で云へば、春は飽くまで詩人的、秋は、詩人的の一面と哲學者的の一面とを兼具してゐるとても云ふべきであらふ。

以上は、春秋の美を、一寸見競べた丈けなのであるが、更に秋の喜ぶべき方面の美とは何であるが、一つ考へて見たい、その悲むべき方面の美は、已に云ひ盡されて、日本人は熟知してゐる次第であるから。秋の喜ぶべき方面の美は、蓋田舍にあるのだ、田園の間に存するのだと思ふ、彼の春の美は、畢竟都會にある、花の名所は必ず都に緣がある、それと恰度反對なのである、

見よ、萬頃の田、八束穂の垂穂のうまし稻の、黄に色づいて年の豊熟を告げてゐる、あれほど樂しいあれほど喜ばしい事はなかろうではないか、粒々辛苦の汗水を垂らして夜を日に繼いで切々と耕耘の事に浮身を窶してゐた、農家の翁、媼、夫婦、童、彼等の滿足は如何ばかりであらう、試みに、畦路に立つて唧〻煙管の、莞爾々々然たる笑顔で、あの田の稔りを餘念もなく眺め入つてゐる彼等を默想せよ、人間第一の樂趣は、正にあの瞬時にあるではなかろうか。

柿も霜に紅みて、枯れたやうな枝振の上に疊々たる鈴なりのさまを、見せてゐ

る棘栗も殼がはぢけて、木の下には三々五々、乙女や童が立交つて、嬉々として喜んでゐる、やれ茸狩だの、やれ芋煮だの、やれ小鳥だの、やれ紅葉見だの、田舍の秋は實に、人の眼をも、口をも、飽かしむるほどの滿足を與へてくれる。この田舍の秋の美が、都會へ輸入されると同時に、唯人の口をして飽かしむるものとあるのだ、八百屋店頭に立てよ、柿の實の緋、栗の實の樺、乃至、葡萄の紫、林檎の紅、追々と蜜柑、香橘、無花果、なども陳列される、畢竟、あれは田舍の人の眼を喜ばせて、今、都會の人の腹を肥やすに過ぎないのだ。

村の秋祭り、あれが又無邪氣な、無遠慮な、互に隔てのない極、質朴な一大樂趣を示すのであつて、一部落擧つて酋長とも見るべき舊庄家の振舞酒に醉ふて、踊つて、一夜を明かすなどは、頗る妙ではないか、さらでも、隣村に嫁せし姉、遠里に入婿となりし弟、皆新家族を連れて、土產を持つて歸つて來て、老いたる父母を圍繞し、濁酒に舌を皷しつゝ、さま〳〵と世間談、野良話、夜は鎭守

の拜殿で興行さるゝ廿四座の神樂の蛇舞を見に行くなどは、何と慕はしい限ではないか。

爐邊で、火繩銃の鑄を磨きながら爺が自慢の、猪狩りの談はあれから日々聞かさるゝのである、籾磨歌の、鄙ぶしに、娘が聲を潰すのは此れからである、旦那寺で御說敎が始まる時節も追々近づいて來た、村芝居の下稽古する閑暇も漸く出來て來た、日本四千萬の中の、其四分の三の頭數を占めてゐる農民の樂天地は、即ち秋の幕が開いてから初まるのだ。

青年諸君、冀くは田舍へ旅行して見給へ、少くとも一日の閑を得ば、田舍の秋の美を探るべく、遠足し給へ、秋風に懷中の寒きをかこち、庭前の梧葉の聲なく落つるを見て、人生無常などと徒らに弱音を吹かず、壁間の蟋蟀禮師に、厭世敎說かれて成程と無駄な涙を落さず、出てゝ大に大自然の懷を探り、美盡くし樂至れる秋の田舍の風物を見舞ひ給へ、次代の日本國民の頭は、須らく秋を

も猶樂觀し得るやう、乃至、秋の美を春の美以上に認め得るやう、健全な圓滿な組織を遂げねばなるまいではないか。

附錄終

明治三十九年四月十五日印刷
明治三十九年四月十八日發行

定價貳拾五錢

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編纂兼發行代表者　大月隆
東京市神田區猿樂町二丁目五番地
印刷者　積山之和
東京市京橋區元數寄屋町四丁目三番地
印刷所　森田活版所
東京市神田區錦町一丁目拾番地
發兌元　文學同志會
（電話本局千〇九三番）
大阪市江戸堀南通　文學同志會大阪支部
廣島市西横町　文學同志會中國支部

不許複製

3/12/40

文學同志會出版圖書目錄

美妙	定價二十錢 郵稅四錢
人生の氣力	定價三十錢 郵稅六錢
人生の初旅	定價二十錢 郵稅四錢
人生の老旅	定價二十錢 郵稅四錢
人生の悔悟	定價二十錢 郵稅四錢
人生の片影	定價十錢 郵稅二錢
人生の目的	定價廿五錢 郵稅四錢
人生經濟學	定價二十錢 郵稅四錢
人生の情事	定價二十錢 郵稅四錢
吾人の生活	定價廿五錢 郵稅四錢
山高水長	定價二十錢 郵稅四錢
風月萬象	定價廿五錢 郵稅四錢
斷巖絕壁	定價三十錢 郵稅四錢
枕頭の山水	定價二十錢 郵稅四錢
悲哀の快觀	定價三十錢 郵稅四錢
萬情萬眉	定價十六錢 郵稅四錢

最近國家社會主義　定價六十錢　郵稅八錢
斬奸狀　定價廿五錢　郵稅四錢
精神と力量　定價三十錢　郵稅四錢
虛心談　定價廿五錢　郵稅六錢
活學談　定價三十錢　郵稅四錢
活の精神　定價三十錢　郵稅六錢
活禪錄　定價五十錢　郵稅六錢
禪學斷片　定價廿五錢　郵稅四錢
聖僧道元　定價二十錢　郵稅四錢
日本佛教拾二傑傳論　定價三十錢　郵稅四錢
馬琴妙文集　定價二十錢　郵稅四錢
滑稽妙文集　定價三十錢　郵稅六錢
戲曲妙文集　定價三十錢　郵稅四錢
呑氣文集　定價廿五錢　郵稅六錢
高等艶麗文集　定價廿五錢　郵稅四錢
立身の事蹟　定價二十錢　郵稅四錢
研學の順序　定價二十錢　郵稅四錢
青年の將來　定價廿五錢　郵稅四錢

作文指南　定價廿五錢　郵稅六錢
山水記事論說文　定價三十錢　郵稅六錢
高等記事論說文　定價三十錢　郵稅四錢
偉人の膽力　定價廿五錢　郵稅四錢
偉人の生長時代　定價廿二錢　郵稅四錢
頓才の詩人　定價十錢　郵稅二錢
深窓の佳人　定價三十錢　郵稅六錢
婦人實務錄　定價二十錢　郵稅四錢
女子講本　定價三十錢　郵稅六錢
活戀　定價三十錢　郵稅四錢
戀と死　定價二十錢　郵稅四錢
墳墓の地　定價廿五錢　郵稅八錢
失策の半生涯　定價三十錢　郵稅六錢
成功秘訣到着　定價廿五錢　郵稅四錢
天籟萬丈　定價二十錢　郵稅四錢
小哲學　定價廿五錢　郵稅四錢
珍本鴨長明海道記　定價十五錢　郵稅二錢
理想の大臣　定價廿五錢　郵稅四錢

禪學の奥義　定價五十錢　郵稅八錢
哲學要領　定價五十錢　郵稅六錢
加賀の千代　定價二十錢　郵稅四錢
成効者の苦學　定價二十錢　郵稅四錢
軍隊の側面　定價二十錢　郵稅四錢
理想の政黨　定價三十錢　郵稅四錢
戀愛の精神　定價三十錢　郵稅六錢
人情の後見　定價三十錢　郵稅六錢
無能の天下　定價十五錢　郵稅四錢
社會學講義　定價五十錢　郵稅六錢
社會學と哲學　定價六十錢　郵稅十錢
吾家の憲法　定價廿五錢　郵稅四錢
人生の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
文學の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
自然界の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
婦人の情力　定價三十錢　郵稅六錢
戀愛の文豪　定價三十錢　郵稅六錢
弱者の臨終　定價三十錢　郵稅四錢

英雄の片影　定價二十錢　郵稅四錢
心識活談　定價廿五錢　郵稅四錢
詩の神　定價二十錢　郵稅四錢
學生の苦心　定價二十錢　郵稅四錢
心學養性篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道體篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學人間篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道義篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學迷悟篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學性理篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學明德篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學靈性篇　定價廿錢　郵稅四錢
俳流の女神　定價廿錢　郵稅四錢
箴言　定價三十錢　郵稅四錢
高等秀才文集　定價廿二錢　郵稅六錢
奇僧の片影　定價廿五錢　郵稅四錢
高等才媛文集　定價三十錢　郵稅六錢
風彩と審美學　定價三十錢　郵稅六錢

審美學要義　定價三十錢　郵税六錢
高等美文斷片　定價廿錢　郵税四錢
女子美文斷片　定價廿五錢　郵税六錢
心琴　定價三十錢　郵税四錢
寫琴旅行文集　定價三十錢　郵税六錢
秀才記事論說文　定價廿五錢　郵税四錢
中等作文組立法　定價廿五錢　郵税四錢
美文組立法　定價廿錢　郵税四錢
近松妙文集　定價廿五錢　郵税四錢

西鶴妙文集　發賣禁止
爲永妙文集　定價三十錢　郵税六錢
芭蕉妙文集　定價廿五錢　郵税六錢
立身冒險談　定價廿五錢　郵税四錢
名流の家憲　定價廿五錢　郵税四錢
社會學問答　定價三十錢　郵税四錢
社會學と事業　定價十錢　郵税十錢
軍人と膽力　定價二十錢　郵税四錢
軍歌集　定價十二錢　郵税四錢

處世の歌　定價二錢　郵税二錢
征露詩集　定價十五錢　郵税四錢
小學高等科字引一學年用　定價十錢　郵税二錢
仝　二學年用　定價十錢　郵税二錢
仝　三學年用　定價十錢　郵税二錢
仝　四學年用　定價十五錢　郵税四錢
中學國語讀本字引一學年用　定價廿錢　郵税四錢
仝　二學年用　定價廿錢　郵税四錢
仝　三學年用　定價廿錢　郵税四錢

仝　四學年用　定價三十錢　郵税六錢
仝　五學年用　定價三十錢　郵税六錢
高等美文資料　定價廿五錢　郵税六錢
殘花集　定價二十錢　郵税四錢
玉琴集　定價二十錢　郵税四錢
すみれ集　定價廿五錢　郵税四錢
百字文集　定價廿五錢　郵税四錢
忍ぶ草集　定價二十錢　郵税四錢
人生と山水　定價二十錢　郵税四錢

テニソンの詩　定價六十錢　郵税八錢

琵琶歌妙文集　定價廿五錢　郵税四錢

謠曲妙文集　定價廿五錢　郵税四錢

婦人の美觀　定價廿五錢　郵税四錢

婦人と家庭　定價廿五錢　郵税四錢

婦人の使命　定價廿五錢　郵税四錢

婦人と文學　定價廿五錢　郵税四錢

英雄僧日蓮　定價三十錢　郵税四錢

新婚旅行　定價五十錢　郵税六錢

不如歸集　定價二十錢　郵税四錢

靜思斷片　定價廿五錢　郵税四錢

殘雪集　定價十二錢　郵税二錢

繪端書使用法　定價三十錢　郵税二錢

百字文の栞　定價三十錢　郵税四錢

漬物　定價十五錢　郵税二錢

淑女妙文集　定價三十錢　郵税四錢

東京女子遊學案内　定價三十錢　郵税四錢

琴曲妙文集　定價四十錢　郵税六錢

31.

259
133

259
133

049102-000-4

259-133

理想的学生

柳内　蝦洲／著

M39
BEK-0085